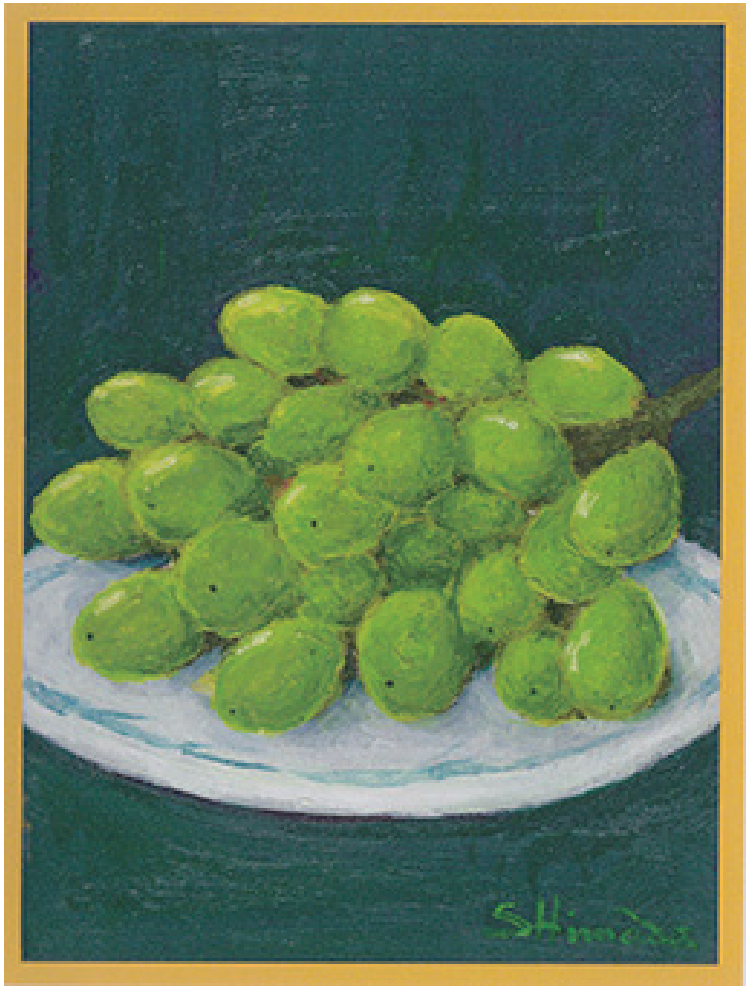
冬雷

短歌雑誌　　TOURAI



12 月号・2026 年

二〇二六年十二月一日発行（毎月一回一日発行）　第六十五巻第十二号（通巻七七八号）

応接室……新作五首

町内めぐる

安田純生



自治会の班長と成り久々にふらりぶらあり町内めぐる

十段の筈の石段十一段　回れ右して数読みのぼる

丁字路に異界の入り口あるごとく熊蟬の鳴き黒猫走る

十年（とせ）ほど右へは行かぬこの三叉路　今も残るかあのマダムの家

ここに住み四半世紀か町内に仲良き人の誰もあらずて

〈白珠　主宰〉

2026年12月　目次

〈応接室……新作五首〉……**安田純生**…
現在の「冬雷」そして明日の「冬雷」……桜井美保子… 1
　冬雷集…… 2
　作品一……18
　十二月集……34
　作品二……42
　作品三……52
十月号冬雷集評……桜井美保子…16
松森邦昭著集『天の虫』紹介……小林芳枝…17
十月号作品一評……小林芳枝・藤田夏見…32
十月集評……鈴木やよい…38
十月号十首選（冬雷集・十月集）……39
十月号作品二評……井上菅子・江波戸愛子…40
十月号作品三評……山本三男・橘　美千代…50
十月号十首選（作品一・作品二・作品三）……59
歌集／歌書御礼……編集室・佐藤靖子…60
大友柳太郎歌集『渚』鑑賞　補記⑨……大山敏夫…62

表紙絵《シャインマスカット》嶋田正之 ／ 題字　田口白汀

現在の「冬雷」そして
明日の「冬雷」

編集委員会・桜井美保子

皆様、二〇二六年十二月号をお届けします。本年度も皆様のご協力によって無事に一年、月刊「冬雷」を発行することが出来ましたことを感謝申し上げます。歌壇の状況を見ますと、結社誌においては月刊誌から隔月刊誌へ、あるいは季刊誌へと刊行形態が移行している状況が見られます。それはやはり会員の高齢化などが進み会員数が減少し、運営していくことが難しくなって来ているからだと思います。

小誌「冬雷」も出詠者はそれほど多いわけではなく健全な運営に必要な会員数「百名」を下回らぬよう、対策を考えました。まず一月号で大山編集長の提案で毎月、出詠者数を開示する「冬雷カウンター」を設置しました。一月号は一〇七名でした。その後多少の増減がありましたが一〇〇名以下になることはなく、この十二月号では一〇九名という嬉しい数字になりました。今後も気を引き締めて出詠者「百名の壁」問題をクリアしていくことが大事かと思います。また「冬雷」に新会員をご紹介くださる方々がおられるのは心強く有難いことです。新会員の皆様の作品が徐々に加わった誌面に清新な風を感じております。

今の時代に短歌雑誌を月刊で出していくことは運営資金の面でも、簡単ではなく、さまざまに工夫し、諸経費をなるべく抑えていますが、無理のない体勢で運営出来ることを目指して、かねてお知らせの通り二〇二七年より会費が値上げになります。詳細は「冬雷」裏表紙の「冬雷規定」に記載されています。ご理解のほどお願い致します。

小誌は大山編集長の主導により、二〇〇六年より印刷用データの内製化に取り組んできました。一番の取り組みは作品欄の活字を大きくして読みやすくすることでした。来年二〇二七年からは誌面の隅々まで活字のサイズに配慮し、いっそう読みやすさ化を進める予定です。

今年は三月号、五月号で「冬雷短歌会文庫」が付録となりました。『大友柳太郎歌集「渚」鑑賞』（大山敏夫著・三月号）と永光徳子歌集『陽だまりの庭』（五月号）が刊行されました。この文庫シリーズは現在三十二冊が刊行されており、それぞれの本が個性的で素晴らしいのです。

会員の皆様の中で自分の歌集を作りたい方もおられるでしょう。この「冬雷短歌会文庫」は自分の作品をまとめることで人生の歩みを記録する一冊にもなると思います。ご希望の方は担当選者にご相談ください。

この夏、ホームページで毎月掲載のＰＤＦ版「冬雷」が電子書籍として国会図書館デジタルコレクションに入れて頂けることになりました。二〇二八年には、電子書籍・紙出し冊子の形での新しい発行を検討しております。

今後も輝きのある誌面を継続します。ご理解とご助力をお願い申し上げます。

冬雷集

小林芳枝　東京

午後五時に一人来て七時に一人来る稽古の合間に食べる夕食
コンビニのかつ丼にする夕食にインスタントの味噌汁が合ふ
生前に師の勧めくれし太筆を使ひ始めるさいごの一本
プリンターインクを買ひてダイソーにも寄りぬ歯科医院の予約までの間
油揚げ人参竹輪細く切り友に貰ひたる切り干しを煮る
一日が短いねえと思ひつつ日暮れの部屋にテレビを点ける
起きる時刻眠る時刻のおほよそに決まりゐて今日も一日短し
小柄なる体よく動き働きし母なりきわれは遠く及ばず
後トレイの葉書を横にしてみたらコピーしますと出るプリンター

赤間洋子　東京

こんなにも薬飲まねばならぬのか溜息つきつつ飲むことがある
亡くなつた友が時々やつてきて励ましてくれるやうな気がする
まだできる掃除洗濯おさんどん物忘れだけは制御不可能
二本足で歩けることの幸ひを噛み締めつつ通ふシルバー体操
九十一歳一人暮らしは気楽だがたまに不安になることがある

公募展今年も入選の知らせありすぐに報告恩師と子等に
教へ子が今年も数多きてくれて作品囲み記念撮影
展覧会終はればすぐに来年に備へてデザイン考へるが楽し

兼目久　栃木

馬鈴薯をまきしところに棒を立て雑草生ふるも目安とせり
教師になつて以来小学校の8年間を音楽に費やす
「大谷」が2号ホームランを打つたのは4月4日なりとメモ帳に記せり
北海道は40度を越す季節なり地球の変異地変を感ず
朝夕に稲の寿命を考へて十月初旬に倒れる稲多し
心配さうに見守る人の目前にて18ｍの鯨は死せり

森藤ふみ　東京

スーパーの学童用の文具売場トイカプセルの広場に変はる
不動尊の大鳥居をくぐりたる参道脇にコンビニの建つ
診察を終へたる医師は重圧が高いと一言声高に言ふ
朝夕に血圧測り記録せよ血圧手帳なるもの持たさる
子の作る人参サラダわれの分取り分けあれば礼を言ひ食ぶ
朝夕の定時に測る血圧を時に忘れて手帳に書けぬ
われの買ひ娘の買ひくる野菜たち娘はセッセと料理してをり
整形のリハビリ終へて外に出れば雨の上がりて茜の空なり

八十代最後　　櫻井一江　東京

階段を踏み外さずに日々来られ八十代最後の生日迎ふ
娘より「祝誕生日」の文字入りて旅先ベネチアの写メール届く
今までにこれ程多く受けゐしやメールに電話に生日祝ひの
生日に受けたる言葉「これからも」我が願ひにも重ね感謝す
若きらに示す手本の一つ無く今の有り様ただ曝すのみ
読み聞かせボランティア勧めし藤原氏フレイル予防の早き提唱者
MRI・PETの検査も無事に済み喜び残す「モニターの参加」
年ごとの検査結果は「年相応」ホームドクター曰く「合格ですね」

有泉泰子☆　山梨

子や孫の祝福受けて笑みいっぱい夫九十歳の誕生日迎えたり
仕事終え集いくれたる子や孫とテーブルあわせる夫の笑顔
「幸福が飛んでくる」とぞ胡蝶蘭大きな白花見守りくるる
お祖母ちゃん大丈夫？　との電話あり地震に怯える我を案じて

青木初子　神奈川

正午より急に気温の高くなり冷たき水に喉を潤す
冷たき水飲み過ぎたるか胃の巡りきりきりと痛み始まる
気圧により体調変化目まぐるし高齢の域に入りてあるある
常温の水は体にいと優し冷たき水はしばし絶ちたり

長雨に花鉢は水をたつぷりと含みて重し腰庇ひたり
大工さんの移動をしたる花鉢を引きずりながら定位置に置く
花鉢の移動の手順前日にシュミレーションする無駄なきやうに
紫の花を咲かせるつゆ草の茎を手繰れば何かに刺される

吉田綾子☆　茨城

夜も更けて降り継ぐ雨に甦る決壊したる印旛沼の映像
この夏の酷暑の故か大欅早も黄ばみて散り初む彼岸
朝夕の秋の気配に軒下の木立ベゴニア勢い帯びくる
数多咲くベゴニアの花手に取りて雌花雄花の相違に見入る
両眼の白内障の手術後のあまりの明るさに目をば疑う
見慣れいる蔵の白壁一段と白の際立ち妙に美し
新聞やテレビの字幕書類等眼鏡つけず読めるは楽し
熱き茶に頂き物のずんだ餅秋日差し込む小縁で一服

橋本文子　鳥取

実りたる田の面美し黄金の穂波陽に映え青空のもと
コスモスが農道沿ひに丈高く豊かに続く桃、白、燕脂
地域にて育てたコスモス街道は稲田をひきたて嬉しく優し
頂上に白雲たなびき秋空に今日の大山裾野拡がる
草むらに薄紫の松虫草静かに止まる紋黄蝶

中村晴美　茨城

玄関へ降りる前の足首に激痛走るスジの伸びしか
足首の痛みの原因不明なり挫く事なく捻るもなく
新調の鞄は軽さを第一に価格も安きナイロン製とす
ナイロンの鞄にあれこれ詰込みて結局重さ減らすことにす
中庭に洗ひ熊の死骸横たはり朝日に輝き毛並み美し
アラヒグマの死骸の扱ひ戸惑ひてネットに問ふに燃えるゴミなり
ゴミの日に般若波羅蜜多と唱へつつ中庭に果てしアラヒグマ送る

歌の尾根　山口嵩　福島

冬雷へ誘ひくれたる同級生語り草たる我らのマドンナ
短歌との関り国語の時間のみ作歌の記憶「宿題」として
一年は冬雷入りを悩みしも添削介し興味わきけり
推敲の重要性を知りつつも歌稿締切り明日へと迫る
投稿のたびに浮びく推敲の重きを説きし川又先生
ホップすもステップまでは至らずに短歌の姿いまだ霧中に
歩み来て未だ見えざる歌の尾根しばしの休息これもステップ

酒向陸江☆　東京

秋の雨一ト月続き紅白に咲きたる彼岸の花も倒さる
爽やかな風を恋しく窓を開け曇天の空恨めしく見上ぐ

粗大ゴミシールを貼りて自転車や使わぬ家具をゴミの日に出す
隣町までも走らせ乗り慣れたる自転車なれど事故せぬうちに
粗大ゴミ出したる後の達成感翌日はぐったりあちこち痛し
九十四歳迎えたる友の誕生会隣町までバスでのんびり
杖を持つ友のとの外出ゆっくりと階段避けてエレベーター探す

天野克彦　大阪

こぼれ萩踏み迷ひゆくこの道はわが若き日のよろこびの道
志賀邸といまも呼ばるるこの旧居「暗夜行路」を仕上げしところ
繁茂する庭木ははやも黄葉して見知らぬ小鳥ここだも騒ぐ
けふひと日部屋にもの読み雨を聴きこころを満たし寝ねんとすなり
死ぬるまでに読みたき本を書き出してまづ読みはじむ「とはずがたり」を
一都一道二府四十三県ことごとく巡りし車の免許を返す
昼寝する習慣なけれどこのごろは机に凭れうたた寝多し

高松美智子☆　栃木

秋雨前線長くとどまり久びさの晴れ間に仰ぐうろこ雲高し
季を違え花を咲かせる紫陽花のくぐもりたる赤も九月の彩り
「黒蝶」と名の付く深き紅のダリアは幾重も思索重ねる
地をつかみ三年経ちたる大輪のダリアの茎は人差し指ほど
「おむすびが形にならない」ふと漏らす母のひと言寂しさ滲む

千葉県を幾度いじめる台風か友の自宅は二度目の浸水
ソウルフードのイモフライまで二百円値上げのペースとどまる間もなし
いけ花に流派の個性ありありと龍生派の作品を時かけてめぐる
髙橋説子　栃木

完全に枯れて仕舞ひたる河津桜の真つ黒な葉が歩道に散り敷く
三月の地震の日には濃き色の花を毎年付けてをりしが
巨大なる炭と化したか河津桜の真つ黒な葉と幹の怪しさ
けふこそは黒き葉を掃き集めんと晴れの日待てず濡れ落葉ふむ
十五夜の大き花瓶に投げ入れたるススキとよく合ふ枯れ色あぢさゐ
大移植に耐へて咲き継ぐ百日紅のシンボルツリーとしての貫禄
鳴呼けふは庭にも出ずにかじりつくアジア大会卓球録画に
覚えたてのアラーム機能を試しつつ目覚し要らずの一人旅を待つ
大塚亮子　東京

電車降り五分足らずのわが実家コロナ禍以来何年振りか
コロナ禍に東京よりは来ては駄目言はれて暫く帰省する無し
馴染みたる僧に代りて継ぎくれし僧は私と同年なりき
大雪から守りくれたる雁木通り学校までを濡れずに通ひし
雁木通り残るを選りて町中をゆつくり巡る自転車借りて
兄逝きて空き家となりたるわが家はお日様のした雨戸は開かず

「おかへり」と迎へくれたる兄の声甦りきて生家を仰ぐ
二階屋のわが部屋ありしはあの辺り思ひ出いつぱい詰め込みて建つ
月下美人　嶋田正之　埼玉

これ程に大雨つづく記憶なく日本列島異次元に入る
エルニーニョ現象と言ふ説明に渋々ながら納得をして
台風の三個続けて発生し日本列島穏やかならず
指先をすぼめ捻れる形状の月下美人の咲く夜を待つ
家中に噎せ返るほど芳香を放ち開きぬ月下美人は
短時間一夜のみ咲く花なれば開きゆく時誰か呼びたし
月下美人花咲く時の短くて家族は眠り独り眺むる
ウヰスキーグラスを翳し花に向け有難うよと独り呟く
三年をつづけ咲きたる月下美人四年目めざし育み行かむ
江波戸愛子☆　埼玉

この年も二箱の柿届きたり娘の選りしふるさと納税
三日間食べたら鏡を見てという昆布を食べて鏡をのぞく
利尻昆布見るたび想う利尻島の海に揺らめく数多の昆布を
北海道行かぬ夫と連れ立ちて行く計画の未だ叶わず
町会の祭りの山車と神輿の掛け声小さく聞こえてきたり
年年に少なくなりぬ山車をひく子供と神輿を担ぐ子供ら

幼少の男孫二人に付き添いて祭りの山車を引きしことあり
橘　美千代　新潟

姫沙羅に来てはまつはる小鳥二羽スズメにあらずあれは四十雀
わが後ろよぎる気配にふり向けば背高きコスモス風にさやぎぬ
見渡すかぎり刈り取られたる稲田の中いまだ実れる一区画あり
ライスパックと書かるる巨大な米袋どすんどすんと並ぶ倉のまへ
田のなかに緑豊けき森見えて奥の院赤き鳥居つらなる（大友稲荷）
落雷に大木倒れて空きしスペース新たに奉納の鳥居にうまる
無数なる奉納されし白虎らのさざめき満ちる祠のうちに
ひとときを火の玉となりあたり燃やし田んぼの果てに夕日沈みぬ
ブレイクあずさ☆　カナダ

ただ一人パレスチナ旗を振る人へ声をかけずに過ぎ来てしまえり
Free Palestine（パレスチナを解放せよ）と説く声の追いかけて来る雑踏越えて
クーフィーヤ身に着ける人に立てられる中指それより多き親指
画面より嘆きと怒りのあふれ出し律動高まる「タカイチヤメロ」
報道の自由度低き日本らしＮＨＫはデモを無視する
わが瞳の動きを調べるドクターの瞳は冬の湖の色
左目の手術はしないと決めた午後風に向かってずんずん歩く
病む猫に話しかければひっそりとフサ尾揺らして返事をしおり

レシートに八の数字の並びいて中国系の店員ほほえむ
鈴木　やよい　東京

雨に立つ滑り台囲む水溜りは数多の子らの踏みしなごりか
待ちかねたまぶしき朝日は長雨に朽ちて地にある柿をも照らす
人けなき夜の校庭見守りてヒマラヤ杉は黒々と立つ
ホームにて静かに見下ろす鳩の目は疲れた吾を何故か見つめる
賑やかな通りがかりの学校に子らの玉入れ遠巻きに見る
両国の「力相撲」の石像は可愛い尻がそこだけ黒ずむ
公園の地面に置かれたモザイク画「赤富士」なりと一目でわかる
中村　哲也　宮城

今日ひと日観光列車に只見線朝から会津若松は晴れ
走り行くトロッコ列車に朝の風十月十日の半袖寒し
朝霧に遠き山影霞みゐて連なる峰の黒々を見る
沿道に三脚立てて並び立つ撮り鉄なる人初めて見たり
満々と水を湛へて只見川木々の緑と青空映す
橋梁を列車渡れば一斉に泳ぐカルガモ低く飛び立つ
只見線下りを行けば板張りの壁の民家もまだ残りある
田端　五百子　岩手

戦争も平和も観てゐむ月明り国境の街風荒ぶらむ

窓開くる小寒き夜風忍び入る清かなる月中天に澄む
明日の日もあると信じて取り敢へず冷蔵庫を開け中身を満たす
手の甲に味見と「葛餡」ちよんとのせ嗅いでは舐めて長の習慣
海霧のほどける暁午前5時稲田見まはる鉢巻きの漢は
実のなる木「飢ゑを助く」と夫植ゑて四半世紀よ柿は鈴生り

飯　塚　澄　子　東京

病院の月末予約三日続く内科医二人と入院相談
問質性肺炎数値高かりき入院をして薬治療とす
現状の日々を過ぎつつ新しき薬を受け取り外科医へ急ぐ
朝一番外科医の注射を膝に受けウォーターベッド等治療の木曜日
九月末の墨田区の詩吟コンクール十五人受けて十人入賞
賞状と楯をそれぞれ受け取りて受賞五人の弟子の笑みたり
教へ子の二位と四位は区役所で十一月三日受賞の栄誉

飯　嶋　久　子☆　茨城

生協の注文書におでんありそんな季節か秋深み行く
グラウンドを一周すれば千五百歩あとは午後田の道歩まん
一日の我が課すノルマ三千歩ねぐらに帰る椋鳥あまた
県展に友を誘いて出向きたり五十号の娘の絵めざす
太陽の香り豊かに乾きたり抱くすすぎもの両手にあまる

朝夕は満員になる海浜電車昼は空気を運ぶが如し
海浜公園コキア色づく季近しキバナコスモス色どりそえて

山　本　三　男☆　群馬

居間にいて妻は相撲を観ていたりそろそろわれは二階へと行く
今日見れば彼岸花すでに盛り過ぐ畑中の道に陽の傾きて
年金を貰いたやすく暮らす日々再び「おしん」を観たくなりたり
日本語の字幕をつけて「おしん」観る聞き取りづらくわれはなりいて
「おしん」観て涙流してわがいたりしばらくの間清き心に
老いたれば何かと車が頼りなりスーパーに行き図書館に行き
二階まで蚊が付きて来る庭仕事終えたるわれの温き体に
長雨はようやく終わりサボテンのするどきトゲに秋の陽の差す
この頃は雨降らぬ日の続きいて穏やかな川に鴨ら群れいる

江　藤　ひさ子　大分

廃車とは斯くなるものぞその不便遠近の大方タクシーを頼る
タクシー利用の頻度急上昇近距離の都度「近くて御免なさいね」と言ふ
週に一度の真向法体操週二度のグランドゴルフに和む心身
グランドゴルフ今日の好調五十米の第二コースにてホールインワン
ホールインワンそれの爽快感は半端なし五十米は殊に格別
折折に吾も作りゐしだんご汁もうそれは遠き遠き昔の話

戸部田　とくえ　福岡

聞きかへすことの多くを娘にまた指摘されて素直になれず
庭の木に年々秋には雀蜂おそるる季節と今年もなりぬ
藤袴おもひがけなく枯れはじむ日々の水やりかかさず努めて
友からの電話体調すぐれぬとはじめて弱気の返事に戸惑ふ
待ち望む雨降る夕べ雷の音にも恐れず窓に見てをり
トラノ尾の花のつやなく咲きくればひと雨ねがふその根を潤す
面立ちの孫によく似るバレー選手を親しみ深く応援してをり

稲津　孝子　福岡

植木屋に頼みて明かるくなる庭の翳りてきたる秋分すぎつ
保育園の帽子の集団信号を待ちをり涙いでくる思ひ
私らしくあるため小豆を水に漬けおはぎを作る彼岸の入りに
夫の夫らしく捨てられずにをりぬ「国境なき医師団」の領収書
長男の一家と同居したること羨しとひと言ひくれつ
蹲踞の水に浮かびてゐる蟷螂この世に思ひ残すことなく
遅くまで蒲団で歌を作りゐし母を思へり眠れずをりて
有機合成化学の夫の師の切抜き出できつ平成最後の新聞
七年ぶりフェルメールの絵日本に来てをり見に行く事なしこの度も

井上　菅子　山形

北の街に憧れ止まず潮の香の幅広昆布にさへ胸焦がす
小説の中の人物草色のジープで夢に逢ひに来る
帰化植物の毛深き草も秋草に混じりて枯れて夢を閉ぢたり
青き実が赤くなれずに梅擬き地球の翳りここにもひとつ
ハシビロコウのやうに寡黙に過ごすなら口の災ひ一世なからぬ
世の中へ不満の鎌を振り上げて路傍に果つる秋の蟷螂
動物の保護活動に送りやる古着に聞こゆる家族の会話
秋の彼岸の供華の菊の香ぐはしく朝の曇天こののち晴れよ
些細なる慶事も大きな文字で載る小さな町の平和な町報

井上　槇子　新潟

夕立の後の輝き望みをれどこの年豪雨の風情なきさま
頻繁に起こる熊害（ゆうがい）対策に墓参の供物持ち帰りの札
宵闇の墓参の蠟の火点しをれば石に這ひたる蜂に仰け反る
盂蘭盆の地蔵の前に祈願する人らに賽銭足首に埋もる
停留所の椅子に場をしめ談笑す老らはバスの到着に乗らず
瞬時にて木の爪痕や排泄物熊と指摘す鳥獣被害対策実施隊長は
合同の法事も含む秋彼岸帰りゆく人の労りにあふ
耳遠くなりたる夫と食堂の料理来るまでの会話乏しき
豪雨にて芙蓉の花はしぼみたり寄辺なきごとにはかに怯ゆ

（☆印は新仮名遣い希望者です）

十月号　冬雷集評

桜井美保子

退職後の十五年いつときも休まずに続けたるＤＴＰだけはまともか
大山敏夫

作者は冬雷誌を作るためにＤＴＰを学び、身につけたその技術で毎月の雑誌を編集制作して来た。控えめな下句であるが、組版においては引けを取らない自信と実行力を感じさせる歌。

停電にエアコン止まり蒸し暑し少し窓開くる外は暴風　中村晴美

台風が上陸したために長時間の停電が発生。エアコンが止まり蒸し暑さに耐えるという大変な状況の中、冷静に対処する様子が見える。

合唱祭観客の中の友たちに交りて兄の笑顔ありたり　酒向陸江☆

本番の日までには多くの練習を積み重ねる。そして迎えた合唱祭の日、聞きに来てくれた友人たちに混じって兄の笑顔が目に映った。心の和む温かい場面だ。

茄子焼いて生姜を添へて食はんとす食欲なければ一品でよし　天野克彦

蒸し暑さの続いた日々のことかもしれない。食欲のない時。食べずにいれば体が弱るばかりだ。自らを労る気持が「一品でよし」という結句に出ている。作者の生き方が感じられる。

節高く皺深き指は日に焼けて生涯現役と菜を刻む母　高松美智子☆

家族のために長い間、働き続けてきた母の手。今も元気で菜を刻むその指は老いていてもしっかりと家事をこなす。気概を持って生きる母君の姿が目に浮かび読者も何か励まされる思いである。

ホホヅキの実ほどのトマトふたつ持ち玄関にくる近所の姉妹　嶋田正之

普段から顔馴染みのご近所の可愛らしい姉妹なのだろう。育てたトマトを持ってきてくれた二人を暖かく迎える作者。微笑ましい情景が詠まれている。

手をひろぐるわれに向かひて歩みくる初めての数歩孫を抱きとむ　橘美千代

自分に向かって歩いてくる孫への愛しさがよく伝わってくる。それも初めて歩く二歩三歩。作者にとってもご家族にとっても記念となる歌だと思う。

ことごとく音色も景色も変わりたり一首の短歌英訳されて　ブレイクあずさ☆

どんな短歌が英訳されたのか、ここでは言っていないが英訳されたことで元の短歌(日本語)の味わいがすっかり変わってしまったのだろう。カナダに住んで日本の「冬雷」に所属して歌を作る作者ならではの作品だと思う。

浴衣姿の若き女性ら美しき髪飾りもして花火見に乗る　飯塚澄子

作者が乗車したバスに浴衣を着て髪飾りをつけた若い女性らが乗って来る。車内が一瞬華やぐ光景を捉えている。

夜目遠目ならぬ老の目ほのぼのと皆美しき若き人らの　姉川素枝子

視力が少し弱くなってきた老いの目には若い人たちの姿は皆美しく見えるという、どこかユーモアの漂う言葉に温かみを感じる。

松森邦昭著　歌集『天の虫』紹介

小林芳枝

この歌集は「心の花」に所属する著者の第五歌集である。前歌集『明石の門』以後の二年間の作品から五百首が収められている。五十五年間の脳外科医としての医業を終了された著者は二〇二三年に第三歌集『しゃれこうべの歌』を刊行、一年後の二〇二四年に第三歌集『明石の門』、そして二年後にこの歌集を纏められた。四年間に三冊の歌集を纏めるという情熱に敬服する。

作品は制作順ではなく（部立て）で纏められている。大きく五つに分類された作品を順に紹介したい。

「季節のうつろい」

そちらにもほらこちらにも土筆の子春を摘みつつ八十路ときめく（春）

かぎりなく散りくる花に浮かびくる思いありけり遠き折りふし（春）

一首目は巻頭の歌。春の喜びを全身で受け止めて楽しむ作者像が浮かぶ。二首目は桜に繋がる長い日々が織り込まれているようだ。

電柱の影を継ぎつつ坂をゆく枝葉ゆたかな大樹恋いつつ（夏）

一年毎に暑さが厳しくなる夏、心の内で日陰になる樹木を求めながら歩く坂道の苦しさが思われる。

夏のこる空気を沈め月満ちぬ花しろしろとコスモス浮かぶ（秋）

夕暮れに咲くコスモスの花が夏の終りを告げているようで心に残る。

鷹一羽　富士の白地に丸描き青に溶けゆく空のキャンバス（冬）

空の青と富士山の白を背景に円を描きながら飛ぶ鷹が一枚の絵の様で美しい。

「思いを述べる」

ローソクの燃ゆる炎の芯がのび消えぬがごとき癌の細胞

人の体内でしぶとく増殖する癌細胞と日々戦っている医師の嘆きのようだ。

光の輪それは前触れ立ちかわり太鼓とどろき頭痛あらわる

病は医師にも容赦しない。その症状が具体的に詠まれていて辛さが伝わる。

「世相とともに」

町で会う熊がプーさんだったなら仲良くできるね蜂蜜あげる

山に食べ物が無くなって人里に来るようになった熊への思いが優しい。

「悲しみのうた」

ニコチンは「酒で流せば消えるよ」と晋樹先生　二刀流

鳥打ち帽ふかくとぼとぼ歩みゆく桜咲く道　煙草の煙

三月十一日に亡くなった晋樹隆彦氏を悼む歌。桜の下で悲しみが深まる。

「旅の歌」

十万の民の無念の澱のようマニラの湾に夕映え残る

海の面は鏡と凪ぎて写しゆくミズナギ鳥の腹の白さを

国内国外への旅の歌も多くあり世相や歴史を思いつつ楽しませて戴いた。

（ながらみ書房刊）

作品一

大　山　敏　夫　埼玉

耳騒ぎ顳顬痛み覚めをればとほき日の母との会話浮かびぬ
アルツハイマー病みゐたる母「敏夫はなあ」と切り出して言ひきわが十代を
それほどの齢ではないに垂らしたる母の涎をおもはず拭きき
苦しげに息とめてゐし母のガバリ汲ひ込むひと息最期の呼吸
若年性アルツハイマー病むままに死にゆく母をまつぶさに観き
爪立てて頭をあらふ浸かりゐし負の感傷のすんがうも無く
糸電話に話したるひと糸の先にゐしは誰かとおもひ出し得ず
飲み終へて開けば白き正方形薬包紙見て姿勢を正す

正　田　フミヱ☆　栃木

種まきの専用培土セルトレイに詰めて秋冬の種まき開始す
種まきて発芽するまで数日のどきどき感を味わいて待つ
シャベルにて汗ばみながら耕せば一畝なれどふかふかの土
シャベルにて白菜植える畝耕す空を仰ぎつつ深呼吸する
コオロギが白菜の周りに跳ねており千倍に薄めたる酢を掛け防虫

荒草の命片付け耕してカブの種蒔き命を起こす
石灰まき腐葉土混ぜて丁寧に畝を整え大根播種す

斉　藤　トミ子☆　栃木

只ドンと立ちいるのみの姪の娘に浴衣を着せやる汗滴らせ
豊かなるバストに触れつつ御端折りの紐を締めやる若さが匂う
御端折りの紐をぎゅっと締めやれば縁日に食む余裕がないと
三尺の結び方をスマホにて今風の型にどうにか仕上ぐ
着崩れはしなかったよと姪の娘は花火の土産に綿菓子くるる
散歩時の僅かな時の立ち話に同じ話を繰り返す女性
車椅子に押されて来たる老婦人声荒げおり嫁らしき人に

秋　　林　　美智子☆　東京

秋が来た爽風に乗って公園から魔法のように金木犀の香
長月の長々雨を忘れそう十月に入りて晴れの日続く
農園に一日草刈り　秋植えの野菜苗買う明日が楽しみ
柿の実が異常気象に赤々と早々熟れて用水おおう
富山より新米届く　終戦後の食糧難の父にあげたし

浜　田　はるみ☆　埼玉

長雨で稲刈りできず赤字なり稲作やめる引き金となる
豪雨に西も東も被害受け繰り返しには疲弊重なる

梅雨かと思える程の長雨に晴天一日うろこ雲見る
食べ物が美味しくないと生き甲斐が大分なくなり意欲も失せる
イランもウクライナも被害増え原油や物価の高騰やまぬ
日常の事件と水害の事ばかり秋も束の間冬になりそう
あと二年大統領が代わらぬと思えば任期いたって長し

倉　浪　ゆ　み　埼玉

作品の八割がたは読みにけり東野圭吾氏黄泉に旅立つ
逝きし子は黄泉の何処に居るのかなもう一周忌母は元気ぞ
まだ暑き八月なれど新聞を繰ればお節の広告載りて
彼岸まで日数あれど朝夕のはだ寒いのはまか不思議なり
わた菓子のやうな雲が浮かんでる乗つて須磨の海へ行きたし
にぎにぎし氏神の庭のせみ時雨異常な暑さの夏は去りゆく
木犀の花咲きそろひ川越の町はお祭り一色となる

松　中　賀　代☆　高知

デイの日は送迎車まつ間にもリハビリを兼ね足踏みをする
いつの間に赤ピーマンになりいしか一人の膳に色取り添える
雨の日が続く九月は早過ぎぬ夜明けの風は冷え冷えとせり
畦道に四、五本の花咲いた時秋の使者かと彼岸花に寄る
遠目にも銀杏とわかる色づく木冷え込み早く山は黄色に

目の限り向日葵の花の広がりて益子の夏に里山の風
七十過ぎ身も心も軽やかな日は宝物明日を祈る
よっこらしょどっこいしょが友だちで手をつなぎながら過ごす毎日
精神の苛立ちが体調の不安呼ぶ三猿のごと生きて行きたし
雨の日のアンダーパスは危険なり地図で探さん平坦な道
戴き物の南瓜四個は台所にゴロリゴロリと出番待ちおり
バスケットの開幕間近し嬉しさと期待と少しの不安混りて

村　上　美　江　岩手

秋明菊白を好みし主人(あるじ)亡く固まりて咲く隣家の片隅
コタローの歩く速度の速すぎてリードの右手左手抜けさう
「お守り」の小さき袋を届けたり友の手術の日程決まらず
心臓の手術三度の入院に笑顔の友の緩きワンピース
一周忌友の残せしパッチワーク吾が部屋に在り大きく太い木
雨ばかり今年の夏はどつぷりと温泉三昧からだ遊ばす
せめてもの恩返しすら間に合はず礼も述べずに母に触れ詫ぶ

伊　澤　直　子☆　東京

秋空に誘いてもらいたるように昭和記念公園に出かけてみる
黄緑から薄紅濃紅と染まりゆくコキアの畑はふわふわに見える

本　郷　歌　子☆　栃木

花の丘レモンイエローのコスモスの一面おおう傾りを歩く
直島で観たる李禹煥（リーウーファン）の作品の谷中にあるを聞きて出かける
木炭や水彩で描かれたる線の作向き合えば何かを訴えて来る
予定外時間の開いた休日に気になりていた荻窪荻外荘（てきがいそう）に行く
昭和初期の日本家屋に立ち入れば幼き頃に戻りてなつかし

乾　義江☆　茨城

街路樹の緑豊かな木の中に季節の香のする白き百日紅
胡蝶蘭を里の唯願寺から送られ来いまいち育てる自信の無くて
蘭の鉢と同じ品種が美容院に教示いただく水の調節
秋の長雨か線状降水帯に泣かされるそこにかしこにと被害甚大
我が部屋に十九冊の歴史本を運び呉れしが読みでのありぬ
延々と雨に散歩のままならず初に嫁御と苦もなく歩く
散歩道いずこの庭も草茂る転居の後の庭草気になる
街路樹の狭間に大きな山吹の春には黄金の花の咲くらむ

私の秋　永　光　徳　子☆　東京

秋風に小さな羽根を震わせてシジミ蝶舞うコスモスの庭
陽射し受け青に輝く瑠璃シジミ二頭連れ立ち萩咲く山へ
熊出没ニュースとなりし高尾山萩咲く今ぞ瑠璃シジミ乱舞
高尾へと続く川辺の散歩道カラスウリの赤夕日に灯る

川岸に胡桃の古木立ち並び熟れた胡桃は川面に落下
川面には鴨の親子が浮かび居て波紋にゆられ少し流さる

人生模様　松　本　英　夫　東京

老い人よ幼を抱く母親よ優先席は人生模様
長旅に妻は疲れて足を伸べ隣る湯船にくつろぎゐるらむ
買物もレシピも押しやりゆつたりと露天の風呂に星を探せり
タイの人らしき女性の笑顔もて写してくるる夕べの食堂
ハンドルを下方へ押せば水の出づなゐを思へり古きホテルに
伊東よりすんなり帰路の予定変へ富士を見んとて大室山へ
富士山が今日は見えたり大室山ふたとせ前は大雨暴風
夕五時はサラリーマンが続続と道いつぱいに駅へ向かへり

中　島　千加子　東京

やはらかき緑の蔓がゆるり伸ぶマンションポストのうへに朝顔
朝顔の蔓と本葉の産毛たち陽を全身にまとひてをりぬ
二日経ちちぎられてしまふ朝顔はその三日後にまた蔓伸ばす
だれだらう朝顔の種をまきたるは暗くて狭き隙間の奥に
本当はいくつの種があつたのか陽射しも雨も届きにくき場に
ひとときの自然のいろに胸のおく蝋燭ともるやうな安らぎ
東京の鷺草をはり母の花咲きくる頃と小鉢を思ふ

大塚照美　兵庫

晴るる日は日光浴びよといふ長男「付いて行くよ」と玄関に待つ
ラジオより流るる「帰りソレントへ」も一度聴きたし姉のソプラノ
酸つぱさも半端ではない夏みかん好みし母は青梅もまた
処分せしミシンを今は惜しむなく手縫ひの雑巾二枚仕上ぐる
逃げ廻る大きな蟻の早足にこちらも本気われを忘れて
思ふまま足の動かぬ日にちの就寝を待つが唯一の幸せ
先立たれて一人住まひの障害ある向かひの父君がシーツを干さる
卓に置く金封手にして押し戴く息子みてをり襖のかげに

三好規子　福岡

京都より孫はテーブルヤシの鉢を抱へて施設に会ひに来てくる
猛暑日の続く昼間は出歩けず出前の握り鮨を孫と楽しむ
カナダより戻りて以来まごの食の好み変はりてあつさり物欲す
施設長が電動にてかき氷作りくる餡と練乳フルーツ乗せて
記録的豪雨の千葉や北陸の浸水被害に福岡は渇水
紅白の幕めぐらせて敬老の祝ひの膳と薯蕷の饅頭
白寿二名と卒寿の人に施設より表彰状と花束おくらる
出し物の獅子舞身軽く中年の男のスタッフが奮闘したり

須藤紀子　埼玉

おほ雨に倒されたる稲に容赦なく今日も降りしく秋の長雨
米作りやめたる兄が持ちくるる南瓜いんげん少し自慢し
桜落葉を踏む足音のさくさくと歩きし犬を偲ぶこの道
隣人の子らと我が子の幼き日遊びし川にハヤの群れをり
浅き流れに浮き輪浮かべし夏の日が遥かになりてみづは澄みたり
鵯が時折みかんの枝にきて未熟と見ては飛び去りてゆく
渋谷駅地下五階ホームに降りるとき地球の核のやや近くなる
補助金の終はりて税の上りたるこの秋よりは何を減らさむ

齋鹿ミヤコ　神奈川

長かりし雨と曇りの過ぎゆきて柿の実の色あらはれきたり
食べ納めになるかもといふコメントの付きたる売り場の西瓜を買ひぬ
雨の日のショッピングモールに子どもらのイベントの声のひびき続きぬ
買物の途中にひとり入る店テーブル席に一人のひと居り
四人席のテーブル独り占めとなるひとりランチに少し慣れきて
週末の友とのランチの行先を探して予約す台湾料理
防犯のパトロール中の買ひ物のはなし続きぬ空青くして

佐藤靖子　東京

波のおと聞きて暮らしし人はいま笹の葉の鳴る丘に眠れる
水屋納屋仏間床の間などなどの言葉に用なくなりて暮らせる

鳴門巻輪切りにすれば渦巻の紅ののの字はのんびりせる「の」
鳴門巻縦切りすれば海底に渦直下する猛しきくれなゐ
花咲きて分かるといへる公孫樹の雌雄街路に踏まれ轢かるるその実
スチューベンキャンベルといふ味の濃き葡萄はいづこ蘇りてよ
雨の予報傘のマークにふたしづく付きたる傘を初めて見たり
「悲しい結末ではありません安心してご覧下さい」とて見をり

鈴木計子　東京

花柄の浴衣に赤き帯結び髪の飾りの清しく立てり
返事なき賀状の友ら十餘名知らせ来ざるを良しとなすべし
その時に適ふ写真のなき事を時をり思ひ思ふまま過ぐ
その時の写真を加入の互助会が撮りてくるるといふに豫約す
子とわれが水玉ちやんと言ひ時に名の出ぬ草間彌生が逝きつ
ふる里の言葉に会話なされゐる「雪夢往来」親しく読めり
よく会ひし四人の二人がヘルプマークつける身となるこの数年に

石渡静夫　茨城

大雨が三度千葉県を襲ひたり被災者嘆く「何で千葉だけ」
お茶会の受付済ませ待ちをれば友の近づき何席目かと
裏方で働く友は出番無く逢へてよかつた待合時間に
ＮＰＯで友と働く三か月笑顔変はらぬ五年経つても

夕方の散歩の吾の影長く長身にしてまるで別人
連日のニュースは個人情報の流出被害不安を煽る
昨年に比べ参加者激減す広い会場に隙間の目立つ（取手市スポーツフェステバル）
日没は早く北風忍び寄る秋をゆつくり味はひたかつた

西村邦子　兵庫

中高一貫校なれど別立地山手に建つ孫の高校
「音楽と展覧の会」とふ案内に初めて訪ぬる孫の学舎
おもてなし音展のテーマは「New 魂」創り上げたる息づく空間
校内の地図を片手に探しをり孫の教室一年Ｃ組
金木犀漂ひどこか懐かしい今日は娘の誕生日なり
長月の法話に須磨寺住職は「人生は縁の無限連鎖なる」
探しをりし写経の出会ひも縁なりローカルニュース「リブラブひょうご」

植松千恵子☆　静岡

捨てようと毎年のこと夏帽子洗い晒しで頭に馴染む
いつの間に数多飛び回るアキアカネ涼しき空を平和な空を
いつの間に群舞のトンボいなくなり気温上昇感じとったかも
引き出しの八十四円の古切手今は一円足して葉書用
喜寿迎う友に花鋏贈りたり大病越えて健康でいて欲し
宮司なき村の神社は夏草と彼岸花におおわれて在り

家前は駅への近道パラソルを差したる男の多きこの頃

伊豆旅行　①　永野雅子☆　東京

五年前泊まりし宿が今からでも予約出来ると姪からの連絡
この夏は旅行も行かず働きおり伊豆への旅が急遽決まる
十人乗りの車にチャイルドシート付け平井駅で待つ姪家族を迎えに
定員の九名揃い出発す先ずは横浜ズーラシアを目指す
ズーラシアはかなり遠くて娘と二人来園諦めた記憶のあり
期せずしてズーラシア来園の念願叶う同行の娘は既に二十九歳
今回は母の手を引き動物を見学する我不思議な感覚
退園後昼食を取り伊豆へ向かう現地到着波荒き海

川上美智子☆　高知

捥ぎ立ての無花果五個を手のひらに「初採りです」と笑顔の隣人
物忘れ多いと嘆く隣人はわが好物の無花果忘れず
高知では初のコンサートＨＩＭＡＲＩさんファンの友に誘われて行く
ＨＩＭＡＲＩさんは名器「ガルネリ」を手に弾くも高度な音色我には解らず
国際的バイオリン奏者のＨＩＭＡＲＩさん十四歳の話す声あどけなく

川俣美治子☆　栃木

電線にすずめが一羽毛繕い心なごめる雨後の青空
雨の日にミシン使わず手縫いするそんな気分の秋の午後なり

コーヒーをアイスかホットか決めかねて九月の空は季節が揺らぐ
雨の中カサカサ音する金木犀雀飛び立ち花散らす朝
朝からの青空広く空気澄み待ちに待ちたる洗濯日和
仏前へ栗ご飯供え「おいしいよ」声かけ合わす手に秋の風
風受けて逆さに揺れるとうがらし赤の鮮やか青空に映ゆ

大野茜　神奈川

強雨より雹に変はりて庭叩く胡瓜の葉に穴茎も折れたる
腰辺り異なる感じの翌朝は痛みあるかとそつと起きゐる
深夜四時ワールドカップのブラジル戦寝床の中でラジオを握る
久しぶりに震度四とふ揺れの来て大震災の予兆かと不安
夏来たか朝の血圧はかりつつ空見上げれば靄のかかりて
紫蘇の葉を摘まんと屈み選びゐる虫に食はれてほんの数枚
思ひ出の蝉鳴く夏は帰らぬか灼熱の中静まりかへる

小林貞子　山形

中秋の名月のやや左欠け歪に見ゆと遠目利く夫
茗荷の子根元探ればこつつんと指先弾く蕾の数多
茗荷の子肉と茸の味噌味を木通に詰めて焼けば美味しも
帯状疱疹二度目の罹患の処置早く軽く癒えしと友より便り
十月の子の生れし日の空明し今年も深き青を愛しむ

真夜起きて急ぎ取り込む茸干し此の頃小き忘れ物増ゆ
時無しの痛みに顔が顰む時眉間の皺を手で宥めやる
百日草は色と大きさとりどりに今も咲き継ぐ秋はたけなは

本　間　志津子　山形

早朝にヘリコプターの鈍き音児童が一人行方不明と
雲厚き危ふき空より降り出すかポツリ一粒額掠める
「散歩しよう」誰言ふとなく外に出づ日和山より吹く風のあり
倒木の肌白々と水没し川の淀みの深きに朽ちる
飛島に寄り着く遺体ありと聞くいまだ行方不明のままの児童も
タクシーを待つ間激しき虫の音の競ふがごとく闇に湧き出づ
夜の闇にありてネオンや信号の色彩まばゆく街を彩る

梶　尾　栄　子　兵庫

払暁に遠慮がちなる蝉の声しばらく後には大合唱となる
稲刈機乗せて来たれるトレーラーわが丈よりも高きタイヤの
一畝に大根人参菠薐草少量づつ蒔くひとりの暮らし
クーラーの設置をしたる去年の夏町工場の子の大き決断
三棟の工場にクーラー設置すもその電気代思へば恐し
植木屋に出せる茶菓子を台所で相伴してゐる十時と三時
歩きゐる野道に涼しき夕風は寄り添ひくるる亡夫とも思ふ

高　橋　燿　子☆　埼玉

カタコトの会話が車内を潤して笑顔の多い目的地まで
外を指し母と見ている幼子の座席に揃うアニメの靴下
渋滞をさけて山越する父娘昔の記憶楽しみ辿る
息子と二人あおぐ那須山青くすみ寒さに驚く十月四日
音立てて穴の中より盛る火に塔婆はたちまち灰になりゆく
六キロを歩いた友も師も居ない燃え盛る火に思いで次々
馴染みたる犬眠る地に供えたりこの山に咲く竜胆の花
いつの間に集う人がシニアなり元気になれる姪の手料理

野　崎　礼　子☆　埼玉

一口を舌に転がすポポーの味マンゴーバナナ柿にも似たり
完熟のポポーの甘さ香り立ちカスタードにも似たるくちどけ
階段を一段飛ばし降りたる我「無茶はするな」ひとり呟く
「元気ね」と言われ思わず「元気よ」と心の空はやや曇り模様
一つ買い一つは捨てる鉄則をいつしか破り増えゆく洋服
失明の危機を乗り越え夫退院す夏服しまい秋空仰ぐ
リスクより自由を選ぶ百四の叔母は独りの暮らしを楽しむ
波のごと雲の連なる神無月出雲の国へ神々集う

（☆印は新仮名遣い希望者です）

十月号　作品一評

小林芳枝

鮮やかな赤い茸のタマゴタケ美味しと聞けど採るを躊躇う　斉藤トミ子☆

私の子供の頃には、色の赤い茸には猛毒があると言われていた。食べられると解っていても茸の赤は美味しそうには見えないだろう。作者は食べてみたのだろうか、ちょっと気になる。

猛暑日が酷暑に変わり五時前は暑く眩しく外出できぬ　浜田はるみ☆

最高気温が四十度以上になる日を酷暑日と呼ぶように決まって夏日・真夏日・猛暑日・に続いて酷暑日ができた。辛い暑さが下句に表現されている。

子供らの好物なりし豆ごはんグリンピースははつ夏の味　倉浪ゆみ

旬になると必ず作ってくれる季節の食べ物の味は幾つになっても忘れられないし、作る人の楽しみでもある。グリンピースの出来る季節を今でも楽しみにしている気持が下句に籠められている。

家裏の椋の木陰は涼しいと昼休みした昔なつかし　松中賀代☆

どんなに暑い日でも日陰にはちょっと涼しい風が吹いていたような気がするのだが、と昔を思い出しながら近年の夏の容赦ない暑さを憂う。

ベランダに洗濯物干す手を止めてひとき吾は踵落としす　永光徳子☆

踵落としは骨や脹脛の筋肉を強くする効果があるという。日常生活の中での筋トレは手軽にできて気持も前向きになれるような気がする。

天からの便り届ける糸の花烏瓜咲く母の命日　須藤紀子

烏瓜の花には「よき便り」という花言葉があり、玉梓・結状・という別名がある。私はまだ花を間近で見た事がないけれど写真ではレースを纏ったような形をした白い花で夜に開花するという。あの世から母の便りを届けてくれたと思う作者の気持に心が温まる。

猛暑日の空気の動く程度なり電車待つ間の扇子の風は　鈴木計子

私なども夏には扇子を持って出るので今年もバッグに入れて置いたが使った記憶がない。扇子の風では涼しくならなかったようだ。上句から少しがっかりした気持が伝わってくる。

百合の花思う位置には定まらず花瓶の中でそっぽむきたる　植松千恵子☆

百合は茎の長さと様々な向きがあるので花瓶で花の向きを定めるのが難しい。茎が高く風に揺れる様子から「揺り」と言われたようでもあり結句の「そっぽむきたる」に実感が籠っている。

朝採りの胡瓜ピーマン茄子トマト夫の丹精ざるに山盛り　小林貞子

夏野菜が沢山採れた喜びにあふれている。新鮮な野菜が食べられることは夏を乗り切る力の基にもなるだろう。四句「夫の丹精」がこの歌の核になっている。

「ここにいる全員高橋だぞい」姪が叫ぶ宴会の席　高橋燿子☆

ご機嫌そうな姪御さんの感極まった発言には、みんな一つの家族で良かったね、という喜びが籠められている。

十月号　作品一評

藤田夏見

麗しき朱塗りの社殿をめぐりゆく廻廊の床踏みしめながら　桜井美保子

海に浮かぶ厳島神社の社殿の麗しさ廻廊を踏みしめて歩む時にも作者の心を捉える朱塗りの鮮やかさだ。この廻廊に朱塗りをする女性の職人に出会った事を思い出しました。

荒草の伸びの早さよ尻餅の後の痛さに怠りし間に　斉藤トミ子☆

したたかに打ちつけた尻餅の痛みからの回復は時間がかかる。動きづらさをかかえる作者の目の前で素知らぬ風に伸びる荒草に苦笑いの一首。

フェンスから蜜柑の木まで伝い行く葉をかき分けてゴーヤの実を探す　林　美智子☆

ゴーヤの先端の巻きひげはフェンス、蜜柑の木を絶好の垣根として捉え茂り実をつける。作者は蜜柑の葉と同色のゴーヤを目を凝らして収穫している所だ。

家裏の椋の木陰は涼しいと昼休みした昔なつかし　松中賀代☆

涼み台の上だろうか。大木の木陰に少しの風があれば家内より涼やかだ。冷房の普及もまだない頃の農家の風景。

翁待つ家族は眠れず居るだらう外の雨音無情に冷える　村上美江

この一首には胸を締め付けられました。初句から三句目までで、翁を待つ家族の不安は十分に伝わります。続く「外の雨音」も、連作の熊出没も現実の厳しさです。作者や近隣の方の思いも乱れます。結句の「無情」は、読者が感じ取る余地のある心情を作者が吐露してしまわれた、ただ雨が降っている状態を　ここに置くだけで良いのでは、と考えました。

塀の中木立の奥は見えねども時々あがる歓声嬉し　永光徳子☆

自宅のすぐそばの少年院、高い塀の中には木立がありその奥は見えないが、時々歓声が聞こえる。作者はその声を聞いてひととき、明るい気持ちになるのだろう。未来のある少年達なのだ。

家族みな亡くして神に気づかさる孤立と孤独の声聴く仕事　中島千加子

公認心理士のような、人に寄り添い自立を助ける、それでも立ち止まり続ける人に寄り添う。そんな役割の仕事なのか。家族みな亡くしたという作者は自らの生業を神との繋がりのように思われたか。

年間に一人の捨てる食糧がわが躰重を越えてゐるとは　鈴木計子

大会でお会いした作者はスマートな方そのひと一人の躰重を国民の数に掛け合わすとそら恐ろしい数字です。世界には飢えに苦しむ人もいる。そんなことがこの歌から浮かびあがりました。

新しき糠床に漬けた野菜達上手く漬かれと吾は蓋を閉める　永野雅子☆

連作に古い家の縁の下には糠床が構えていて、毎日の作者の仕事だつた。と今、新しく糠床を作った中に野菜を並べてうまく漬かれと心を躍らせて蓋を閉める作者の姿とその糠漬け、少し羨ましい。結句　吾を言わず「蓋を閉めたり（七音）」とされることで声調も整うと思います。

十二月集

藤田夏見☆　広島

われに憑く妖怪いそがしかもしれず秋の手仕事あれこれ急かす
吸い物と湯引きも並びパン粉揚げ母捌きしよ一匹の鱧
旨きもの作りやらんか来たる子ら二日三日はたちまちに過ぐ
齢とは詮無きものぞと思いつつ話し尽きざる孫どちの側に
一匹の鱧を捌いて母思う夕餉に集まる孫等の食欲
俎板に鱧を下ろして骨切りす出刃包丁は嫁入り道具
銀杏を拾いし従兄の菩提寺の大木なりきこの俎板は
秋晴れの父の生まれ日山門をくぐれば従兄の命日法要
須弥壇に骨壺置かれ位牌には義と徳の文字従兄に香焚く

児玉孝子☆　愛知

会員の集いて祝う敬老の日年嵩なれど行事に参加す
大型の台風事なく過ぎたれば庭草とりてほっと一息す
久し振りに五指を広げて守宮くる声をかけたり独り居の窓
誕生日を祝がるる夕べの卓にあり丹波の黒豆ご飯に炊きて

同居する女孫は誕生日祝ぎくれて夕べに渡さる小箱の包み
誕生日皆に祝がれて九十六歳程よく忘れ健やかに生きたし
敬老の日を祝ぎて女孫三人は花籠持ちて訪いくれたり
紅萩の一面に咲き庭清し揚羽しじみ蝶花叢に居て
二日来てそのまま姿みぬ守宮何処に住むや窓に雨打つ

山崎　猛☆　埼玉

秋祭り神社の広場に集まれる若い衆のなかに友の顔みゆ
トレーナー着た老人は犬を連れ毎日おなじ時刻に通る
デジタルの教科書取り入れ審議する文科省いま割合を諮う
静岡で食いたる「さわやかハンバーグ」期待を胸にデパ地下で買う
秋風の吹きて百日紅の揺れる道墓参の妻は足を引きずる
すべきこと数多あれども一つずつ確かにこなして心落ち着く
富士山の噴火も地震もありうると今のしあわせ思いつつ生く
友よりの訃報のはがき見つめつつ夫人の文字を改めて読む
茜空に現れて消ゆる一点はここぞと航路かかがやく機影

松居光子　三重

奇異の感を抱き見てゐし穴あきのジーパン孫は穿きて来たりぬ
今どきのファッションなのか穴あきの部分にレースのあしらはれをり
半世紀前の料理本を断捨離す写真はモノクロ見ることなしと

料理本を頼りに悪戦苦闘せし新婚の頃なつかしみつつ
調べたき料理のレシピはこのところネット検索で事足りてをり
天候に恵まれぬ今宵名月は雲のかかりて趣きのあり

立　石　節　子☆　東京

咳ひどく胸痛ありて思い出す高校時代の肋膜炎を
コロナでもインフルでもなく只の風邪ひどくだるくて床に臥したり
単なる風邪と言われて床に伏しながら年のせいかと思いめぐらす
医院から青空の下歩きつつ爽やかな風頬に受けたり
鈴虫の声も小さくなりにけり雌のみ残り雄は少なく
小学五年で友達と詩を吟じたり戦後女性の道開かんと
隅田川バックに映し吟じたる詩吟の道はニュース映画に

野　口　秀　子　山形

長女から箱根に一泊誘はれて初めての街に心が弾む
来月の二十日過ぎにて宿を得て確実になり日を数へをり
小田原市に着いたらそばに建ちてゐる小田原城を見学に行かな
リゾートの一泊の宿で夕食を愉しみませう箱根の街で
娘の好みに合はせて行かむ芦ノ湖で心ゆくまでのびのびとして
朝風を受けて仰ぐ空青くして薄雲たなびく東の方に
つややかに一面に光る稲穂かな収穫まぢか村山の里

サイゼリアに寄りて見てをり透明のガラス戸に映る舞鶴山を
卓上に飾り置きたる百日草赤き色にて今朝も凛とす

髙　藤　朱　美☆　茨城

渋皮煮水を替えて重ね煮る友の奮闘感じつつ食む
幼なき日芋餅父が作りおり芋のケーキを父と食べたし
古漬けの胡瓜と茗荷と鷹の爪生姜も切りて紫蘇の実漬ける
届きたる精米の香の室に満ち浸水多きと二階に運ぶ
土鍋炊き新米三合光りたる秋の恵みの馳走うれしく
程の良き疲れは睡眠導入剤秋の夜長にレース編みする
塗料得てベランダ塗りて完了す家も我が身も古くなりたる

羽　田　孝　輝　山形

梅擬莢蒾真弓彼岸花赤が溢るる九月の末に
庭先の色付き初むる莢蒾に鵯のつがひホバリングせり
雲低き西山の森に鳴り響く豊山の太鼓山にこだます
新しき寝床に入りぬ猫たちは重なり合ひて眠りに沈む
山火事の続くあの頃この雨の降ればと降水帯の空を見上ぐる
雨降りて肌寒き日の続きゐて長袖欲しき晩方となる
五十年葡萄作りし亡き父に姉持ち来たるシャインマスカット
義弟より貰ひし竜胆仏前に肌寒き朝紫深し

（☆印は新仮名遣い希望者です）

十月号　十月集評

鈴木やよい

掘り上げたるコンテナ三つのじやが芋を運べず屈む暑さのなかに　佐藤幸子

じゃが芋を収穫した。掘り出すだけでも大変なのに、重くて運べない。それに暑い。「屈む」という動作に辛さが表れている。

除湿機の水捨てながら想ひをり水なき酷暑の被災地のこと　同

何気なく水を捨てながら、被災地のことが頭に浮かんだ。「除湿機の水」という具体的なものを通して、被災地の苦労を体感的に感じているようだ。

梅雨明けを待ちこがれつつ野の端に海ながめゐし少年の頃　岩村知康

夏になれば、子供たちは海辺で賑やかに遊んだのだろう。梅雨明けを待ちこがれた少年の頃。夏を待つ胸の高まりを今も懐かしく思い起している。

沖縄戦をくぐり抜けたる義理の姉の四十九日忌納骨をせり　水澤タカ子

義理のお姉さまは沖縄戦を生き延びたという。沖縄では凄惨な地上戦が行われ、一般の住民が巻き込まれた。お姉さまも壮絶な体験をされたのではないかと思う。ご冥福をお祈りいたします。

小ぶりなるトマト手に取り日の光集め肥えるを一口に喰む　藤田夏見☆

日の光を受け真っ赤に膨らむトマト。それを一口に頬張る作者。おいしいだろう。結句で一気に動きが出る。

孫どちの眠りの前に絵本読みし思い出言いつつ酒を注ぎやる　同

幼い子の成長は早い。絵本を読んで寝かしつけたこともあったと、お酒を飲みながら話している。静かな二人の時間はゆったり流れる。

白樫の生垣刈り込む長男は通学路なれば丁寧に刈る　児玉孝子☆

シラカシはブナ科の常緑高木。生育旺盛で刈り込みにも強いので、生垣にすることも多いという。通学路だからと、丁寧に剪定する息子さん。子供たちのことを気にかける優しさが嬉しい。

お喋りな友の車内の大声に我引き気味に相槌を打つ　金子八重子☆

電車内で大声で話す友人。周りに迷惑をかけているかも知れない。困った。少し距離を置いたように相槌を打つ作者がユーモラスだ。

長靴を引きずりながら冠水の道の無い道怖怖歩く　同

作者は千葉県にお住まいだ。今年、千葉県は何回も豪雨被害を受けた。気候変動もあり、豪雨のリスクは高まっている。ひと事ではない。

宇宙飛行士が光の柱を見しという御岩神社にわれひざまずく　塚本節子☆

宇宙飛行士が地球を見下ろした時、光の柱が見え、そこが御岩神社だったという話があるようだ。真偽はともかく、きっと霊山の雰囲気を持つ神社なのだろう。

盆が来て家族そろいておはぎ食む安寧をそっと噛みしめながら　山崎　猛☆

お盆に家族が集まっておはぎを食べる。心のやすらぎは、このような小さな事にも見つけることができる。

冬雷集

須藤　紀子

ぶつけて硯のはじをこはしたりしまつたと思ひ茫然とする　兼目　久

完熟の桃の実二つ手に持ちて大きい方を娘のくれる　森藤　ふみ

ドクダミの根は細けれど積みてある石垣崩す力持ちゐる　青木　初子

小鳥の声奥の森から聞こえゐて池の静かな水音に和す　橋本　文子

語るとは人偲ぶことしき鳴ける木立の下に蟬を聞きゐつ　天野　克彦

ひざ丈の水を蹴散らし駆けめぐる五歳の笑顔が夏を楽しむ　高松美智子☆

歯の生えてきたるをさな児抱きつきて噛むとふわれも噛まれてみたし　橘　美千代

地を覆ひ生ひ茂りたる蓮の葉の勢ひのなかに花の静まる　鈴木やよい

杖をもて靴を引き寄せ「それでは」と猛暑の中へ一歩踏み出す　田端五百子

たはやすくさやうならと言ひならひ言葉の重み身にしみて来つ　姉川素枝子

十月集

中村　哲也

八月の雨受けて垂るる花房の豊かなるかな柏葉紫陽花　佐藤　幸子

梅雨明けを待ちこがれつつ野の端に海ながめゐし少年の頃　岩村　知康

梅雨明けて凪ぎの入り江に子どもらの歓声ひびく古里の海　岩村　知康

サファリパークにバス近く寄る象キリンその肌に触れ餌をやりたり　水澤タカ子

小ぶりなるトマト手に取り日の光集め肥えるを一口に喰む　藤田　夏見☆

真夏日に花火のごとく広がりて窓辺に咲ける百日紅の花　児玉　孝子☆

糠漬けのなすの酸味のあと少し長めに漬けて冷やし茶漬けに　金子八重子☆

道端に青いイガグリ落ちていて酷暑の中にも秋の気配が　金子八重子☆

盛夏の畑抜けども抜けども雨の後嘲るように草は芽吹けり　塚本　節子☆

父母の歳越えて義兄の新盆へ生かさるる身でハンドル握る　山崎　猛☆

お知らせ

一月号より作品一欄へ
　児玉　孝子氏・藤田　夏見氏
同　作品二欄へ
　後藤　恭介氏・越澤　太朗氏

＊ますますのご活躍を期待します。

■十二月の歌会案内

川越歌会は二十六日㈯　13時より
JR線・東上線「川越」駅500メートル。
ウエスタ　川越　二階会議室3
（参加者は12月号持参）
司会　倉浪ゆみ氏
全員活発に発言する、あっという間の三時間半です。
＊参加希望者は左の係まで連絡。
☎安川敏子（090-4608-7265）
☎野崎礼子（090-9971-8149）

十月号　作品二評

井上菅子

ベランダの苦瓜味良く待ち切れず寸足らずなれど捥ぎて使ひぬ　山本述子

苦瓜は好きな人と苦手な人と、極端に二分するようである。まだ寸足らずなのに捥いだところに、大好物を物語る。

夏のアカネか秋のアカネか群れながらアカネ飛ぶ空　行き合いの空　藤田英輔☆

夏のアカネ秋のアカネが交じり合って飛ぶ空と、夏秋の行き合う空を重ねて、季節の移ろいを捉えた。風景が美しい。

その昔わが一番の楽しみは自転車で来るアイスキャンディ売りの声　安川敏子☆

自転車に木箱を付け、カランカランとくるアイスキャンディ屋。昭和の風物詩。懐かしい読者も多いことだろう。

忘れぬやうメモに記して点眼す暑さに加へてストレスの増す　松居光子

数時間おきの薬なのだろう。メモに記してには、慎重さとストレスの溜まる要因もある。酷暑日の生活の一部が克明。

かのこ百合の群落は花終りいて山のところどころにポツリ咲きおり　加藤富子☆

絶滅危惧種の鹿の子百合、群落の地があるのに驚いて羨しく思った。下の句に花の終った様子が詠まれ、目に見える。

単身赴任三年目となる息子なり「慣れてきたよ」と言ってはいるが　小嶋知葉☆

単身赴任を心配する母と、母の心を慮る「慣れてきたよ」の言葉が心に残る。結句の言い差しに余韻を残して。

去年までは二日で終へし草刈りが三日かかりてまだ終へぬ夏　羽田孝輝

二日で済んだ草刈りが三日以上かかるのは、年齢的体力的かと思ったが、「まだ終へぬ夏」は、この夏の繁茂の多さ故であったかと、考えさせられる歌。

運悪く雨降る中に羽化したるヒグラシが鳴く松林にて　津田美知子

雨の中で羽化した蟬は、羽も体も濡れて決して良い状態とは言えない。「運悪く」の人間に使う言葉がぴたり収まった。

庭木木の露零する音のして去年植ゑたる姫小百合咲く　奥山清子

聴覚から視覚へ庭の様子がしっとりと詠まれた。姫小百合だけに色彩をおいて焦点が定まりリズム感に無理がない。

雨の畑に泥跳ねのつくナス拭ひ手渡す夫の気持受けとる　井上鈴子

泥跳ねは洗い流せば落ちるのだが、泥のまま渡さず拭って手渡した、作者の視点はここにあるが、夫の細やかな気遣いをうれしく思った結句が光る。

種こぼれ玄関まわりに芽ぶきたるインパチェンスも雨を待ちおり　髙藤朱美☆

インパチェンスは大株になると見事な華やかさになる。玄関まわりの華やかさを夢みて、花に代弁させた雨乞い。

すり抜けてゆく風を受け玄関にしばしたたずむ眼を閉ぢて　野口秀子

「すり抜けてゆく風」は、玄関の空間を吹き抜けてゆく感じがよく出ている。結句に心地良さが詠まれた。

十月号　作品二評

江波戸愛子

ベランダの苦瓜味良く待ち切れず寸足らずなれど捥ぎて使ひぬ　山本述子

ご自分でたのしみながら育てた苦瓜の収穫「待ちきれず」に喜びが伝わり、ベランダで育てた苦瓜料理を囲むご家族の笑顔がみえるようです。

夏が来て犬のポールの居る部屋は冷房二十八度を保つ　藤田英輔☆

この二十八度が愛犬にとって快適な室温とわかっているのでしょう、共に暮らしていると家族の一員のように思えてくる。昔に犬と暮らした日々を懐かしく思いだした。

疎開地に水道は無く深い井戸にスイカ丸ごと冷やして食べき　安川敏子☆

井戸で冷やしたスイカのおいしさは今でも思い出すのだろう、地下水は年間を通して水温は変わらないらしい。この歌を頷きながら読んでいる人は多いのではないでしょうか。

初孫が短期留学に出発す見知らぬ国フィンランドへと　立石節子☆

フィンランドは国連の「世界幸福度報告書」で長年一位に選ばれているらしい。お孫さんはその社会を学びに行ったのではないでしょうか。　そのお孫さんを見守る眼差しが優しい。

忘れぬやうメモに記して点眼す暑さに加へてストレスの増す　松居光子

前の歌に目薬の種類が増えたという歌を詠んでいる、一日三回の点眼薬もあれば一回の点眼薬もある。結句に大変な日々であったことがよく判る。

みかも山ふるさとの山思い出の花センターをゆっくり歩く　早乙女イチ☆

リズムよく詠まれていて花センターの中を楽しそうに歩く作者の姿がみえるようで読む側もうれしくなる。

単身赴任三年目となる息子なり「慣れてきたよ」と言ってはいるが　小嶋知葉☆

単身赴任中の息子さんの親を心配させまいとの思いと親としての作者の思いが下の句によくわかる。

庭先の茂みに咲きたる山百合は四十輪のかほり放てり　羽田孝輝

四十輪の山百合の咲く庭の広さはどのくらいなのか。山百合の華やかで芳醇な香を日々に楽しんでいる作者がうかぶ。

秋といふ文字に最も似合ふ花夫の植ゑし桔梗命日に咲く　奥山清子

桔梗の花にご主人を重ねて詠まれた歌に胸が熱くなった

小さな手の孫と遊んだ札幌を思い出して開ける「白い恋人」　首藤文江☆

お孫さんとの楽しい思い出を詠む。忘るること多くなりたる花の名を荷札に書きて枝に留め置く　井出裕子

枝に花の名前を掛けて置くことは作者のみならず通りがかりの人にとっても嬉しいことだと思う。

すり抜けてゆく風を受け玄関にしばしたたずむ眼を閉ぢて　野口秀子

玄関を開けた瞬間にすり抜けてゆく風の心地よさを詠まれた。感受性のゆたかな作者。

作品二

レモン　　桜井　美保子　神奈川

この頃の夫の趣味の変はりきてレモンの苗木三つ買ひくる
レモンの皮はづし取り出す種数個みづ含ませたる紙の上に置く
発芽するか否かを確かむることも日々の張合ひになりてゐるらし
レモン三個発芽の実験には使はずと吾にくれたり洗つてあると
唐揚げに紅茶に添へるくらゐしかレモンの使ひ途多くは知らず
皮、果肉、果汁もつかふことにしてレモンジャム作る夕食のあと
煮上がりてゆく時へらにかき混ぜるレモンの香り楽しみながら
月下美人、柱サボテン、璃の香レモン並びて緑あふるるベランダ
源氏講座に行かむとバスに乗り込めば園芸店に行く夫と出会ふ

秋採れの隠元六本とピーマンをお浸しにして鰹節おく　　佐藤　幸子　山形
「よいしよ」と掛け声かけて立ち上がるテレビを消して今日が始まる
手塩にかけ夫の育てたる玉蜀黍二本纏めて四百円とす
二本まとめて四百円の玉蜀黍完売なれば夫も納得

子や友に配る愉しみ思ひつつ植ゑる白菜の九十本の苗
燃え上がる炎のやうなる花芯伸ばし彼岸花咲くわが家の庭に
厨にて彼岸の木通を煮る傍へ流るるメロディは「ラプンタメント」
病み上がりの友のメールの温かさわが歌を深く読みてくれたり

ひむがしに遠く眺むる雲仙の空高く晴れ秋となりけり　　岩村　知康　長崎
雲仙をみなもととなす清流が千々石の里の稲を育む
秋の気の澄む季節にて稲稔る峡の棚田は我をいざなふ
下岳のゆるやかな道歩みつつ坂の急なる上岳に入る
石積みの技美しき田のあぜに触るるばかりに稲の穂は垂る
宮中へ献穀の栄に浴したる記念碑の建つ道の傍へに
上りゆく道の峠の展望所そこで見おろす岳の棚田を
岩が根の眼下は秋の田の稔り向かうなだりは青杉の森

大鉢に植ゑたるミニトマト実り良く嬉しく数へる一七七個　　東　ミチ　青森
中秋の名月も十五夜も煌々と清しく飽かず眺めて床に入る
咲き終へたる花より順に茎も刈る身体に合はす秋仕舞ひなり
紫陽花の残りはドライフラワーとなりぬ保護猫の部屋に飾れば
尾骶骨を打つは二度目なり「そこに打つ注射はない」と医者が言ふ

慶留間島観光　　大塚雅子☆　東京

阿嘉大橋見下ろす海はウミガメの泳ぐ姿のくっきり見える
住民をほとんど見かけぬ慶留間島ケラマジカには二頭出くわす
国指定文化財の「高良家」に案内役の老人ひとり
石垣の特徴教わり近づけば積まれたる石に珊瑚の模様

早乙女イチ☆　栃木

小雨ふる青葉の中にキンカンが大豆ぐらいにまるまると生る
ミカン生り色づいてきて重たげに下がっているよすこし取ってやる

加藤富子☆　栃木

シルバーウィーク五連休台風25号迫り来て部屋より見てる連日の風雨
東京の雨天の記録更新すお日様恋しく野菜は高騰
我が町は台風の被害少なくて千葉の友に送る仲間のライン
天気予報は晴れマークなり散歩の予定の道筋描くベッドの中で
星型の赤き小さなルコウソウ散歩で見つけて我が家の庭へ
直売場で買いたる新米のミルキークィーン一人の食事ワクワクとする
帰省したる長女も一緒に墓参り道を覆いて草深き土手

山本述子　神奈川

久久に頬に涼風心地よし猛暑の夏を耐へたる褒美
見上げつつ女児のひとこと「帰りにもここに居て欲しいの」と（朝のみのスクールガード）

秋雨と居座り台風重なりて超長雨の被害増えゆく
生徒らの学校使へず近隣の小学校にしばし通ふと
被害地の生徒らの心安らぐやうに朝の見送り場所変へて奉仕す
金木犀の二度目の開花秋風に漂ふ香りにしばし佇む
秋の日に実家の林で栗拾ひしたる幼き日を懐かしむ

藤田英輔☆　高知

フランスに嫁ぎたる若き友は云う「毎年帰るヨよさこい祭り」
雨のごとくユーチューブから聞こえくるタップダンスの強き靴音
「シャツの日」に生まれたる妻の物干しに青きギンガムチェックがなびく
夜半に鳴く声は続きて老犬の寝床を移す妻の部屋へと
朝七時甘とう穫れば葉に溜まりたる朝露の指から肘に
冬鳥は間もなく川に泳ぐ頃草木に降りる露多くなり

安川敏子☆　埼玉

蔵の町の祭りの準備の男たち紅白の幕風にはためく
栗おこわにぶどういろいろ皿に盛り好物並べて笑顔こぼれる
紅葉は青空に映え風に落ち水辺にゆらめく葉も美しい
独り身は賞味期限が気になりてつい食べ過ぎてダイエット失敗す
何となく楽しくない日々雨つづき新米炊いても気は晴れなくて
時計見てチャイムに耳をそばだてる昼着くという人を待ちつつ

小嶋知葉☆　茨城

ライオンズクラブの苗と自慢気に届けてくれた夫の友人
今年また実りの秋は来たけれど友の笑顔は二度と見られず
三十五年歌い続ける「キンモクセイ」のコンサートに行く九月下旬に
十八名の三部合唱響かせて笑顔美しき七十代なり
コーラスの着替えの間合いに演奏するピアノとサックスの音色麗し
小貝川鬼怒川利根川身近にて祖父から聞きし「治水の歴史」
美しき沼とながめし印旛沼決壊の記事に恐怖を覚ゆ

津田美知子　岩手

澄み渡る空に両手を挙げながら深く吸ひ込む秋の気配を
異常気象過ぎれば今年のクーラーの出番少なく夏は短し
長雨後の眩しき朝に目覚めれば季節は移り蝉の声無し
北国ゆゑスノータイヤのコマーシャル冬まだ遠き九月に始まる
ぐづりたる幼子あやしつつ若きママ汗を拭き拭きエレベーターに乗る
五連休「遊びに行くよ」と女孫のメール親に行かずにぢぢばばに来る

金子　八重子☆　千葉

ゴメンネと言う間もなくて手の動く恨みは無いがコバエを見れば
長雨に茹で大まさりの実は痩せてコクも甘味も期待はずれで
蕎麦通の見事な啜りに見とれいる途端に咳き込む七味のかけ過ぎ

二回目の永久歯得て快適に食進みたりインプラントは
「自治会費ポストにお願い致します」手間の省けてどちらも気楽
あきづきを食めば広がる甘き汁幸水豊水はるかに越えて
秋の香り何処からともなく匂い来てさがしてしまう金木犀の在処

水澤　タカ子　山形

勤め帰りに謡曲習ひをさめし亡夫の今も偲ばるあまたの冊子に
新聞に「風姿花伝」の記事よめば解説の本求めたくなる
小習ひ本の「松風」読み終へ眠りたり夢に遇はぬか夫の霊に
夫を亡くし三回忌詣りに来し同級生と空襲受けし校舎を語る
ぬるき湯にゆるりと浸り良寛の詩をうたひてこころほぐるる
公民館の絵手紙教室に誘はるる下手も絵のうち申し込まんかな
わづかのみ畠たがやし大根と青菜を蒔く今年かぎりかと
重陽の節句はわれの誕生日子らと楽しむ菊入りの酒

奥山清子　山形

大の里病苦のり越え優勝す横綱の涙光るを見たり
咲き盛る花虎の尾に揚羽蝶羽根震はせて蜜吸ひ渡る
庭隅に友植ゑくれし曼珠沙華逝きて十年の秋巡り来ぬ
福岡の娘の電話は「大丈夫」熊本地震震度七の朝
厨近くみんみん蝉の声高く一人居の鍋カタコト音す

韮の花供へて秋告ぐ亡き夫の残しくれたる小さき畑の

敬老の日赤飯饅頭に猪口供へ乾杯すれば遺影微笑む

松　﨑　みき子　岩手

原つぱで休む三隻の小舟には落ち葉溜まりて主を待つてる

人の影見えぬ海岸に夏過ぎて西日吸ひ込む引き潮の縁

答へなど無いことを知りひたすらに歩き続ける遠い岬へ

休耕地より山へ還るのか道際のポールに止まり赤トンボ飛ぶ

山間の集落に陽は満ち足りて古民家図書館の若い管理者

井　上　鈴　子　山形

コンバインの刈り取り始むる角刈りの済みたる田圃に今日も雨降る

雨つづき畑の春菊アスパラ菜小さきままにてなかなか伸びず

花弁のフリルのやうなデコラ咲きのダリア満開友の畑に

中秋の名月の澄む空見上げ息子にラインすハーベストムーンを

退職後にんにく作りを始めたる姉はひとり居今年で最後と

ひとつひとつ大蒜を掘り乾かして姉送りくる最後の五キロ

透析の夫は梨状筋症候群整体院に習ふ4の字ストレッチ

十月に晴れのつづきてやうやくに田圃の稲は一気に刈らる

塚　本　節　子☆　茨城

十六年使い続けたるプリンター故障したるか紙を吐かざる

なかなかに捨て難きわがプリンター燃えないゴミの日過ぎて久しき

防犯灯二つ取り付けて夫入院す夏終りゆく雨の日の朝

「よしよし」と五歳の姉は泣きじゃくる妹の頭をゆっくりと撫づ

長雨に色づく稲穂倒れたり刈られぬままに芽の出でにけり

雨の中落ち栗拾う数多なり利平にぽろたんイガより覗く

あく抜きを三度重ねて栗を煮る夕べの厨渋皮撫でつつ

澄みとおる月のひかりにすすき立ち虫の声満ちて夜をつつめり

井　出　裕　子　静岡

チビに似る迷ひ猫居て飼ひたくも我が年齢を思へば難し

引き取り手見つかりたりと姪からの知らせ届いて安心したり

里親に三毛の子猫を引き渡す寂しくなるが幸せ願ふ

軒先に忘れてゐたる風鈴鳴り慌てて仕舞ふ初秋の午後に

いつもより夕餉に一品足し添へむ手強き数独片付けたれば

首　藤　文　江☆　埼玉

友からの台湾旅行のメールあり待ち遠しいみやげ話

夕暮れの心地良い風背に受けて今年の夏は涼しく過ぎる

疲れ果て横たわりじっと動かずに休む身体に夜風が当たる

音がしてベランダに出て見上げれば打ち上げ花火が間を空け上がる

畦道にカエルやバッタが姿見せ思わぬ出会いにわが頬緩む

（☆印は新仮名遣い希望者です）

十月号　作品三評

山本　三男

図書館の学習室は人まばらゆっくり読書する夏の午後　　後藤恭介☆

夏の午後の暑い盛りに冷房の効いた静かな図書館で、穏やかな時間を過ごしている情景が目に浮かびます。人のまばらな世間の喧騒から少し離れた隠れ家のような心地よさや、贅沢な静寂がそのまま伝わってきます。

高齢の夫の草刈る音響き止めば窓より安否確かむ　　今野澄子

ご伴侶が草刈り機で草を刈っている音を室内で聞いていて、その音が途絶えたので心配になったのでしょう。ご高齢のご伴侶を気遣う作者の優しい眼差しを感じます。

池に沿ひ道を歩めば蓮の花梅雨空に向き清らかに咲く　　長谷川　剛

どんよりとした梅雨空の下で咲いている蓮の花を「清らか」と表現して浮き立たたせています。池に沿って歩いて移動している状態から蓮の花の前で静止する視点の変化が巧みです。

秋立つも山際の杜蟬時雨残暑の午后の盆墓参り　　松田忠一☆

暦の上で立秋と言っても、まだ暑い日が続きますが、秋が近付いているという空気は感じられます。山際の杜や蟬時雨という言葉が、お墓参りという静粛な雰囲気を醸し出しています。

汗かきて木道上る頭の中にコーラのCM曲リフレインする　　河原木光子☆

汗をかきながら木道を一歩一歩上っていくリズムが、コーラのCM曲をリフレインさせているのでしょう。山歩きの心地よい疲労感と渇きがコーラの爽快感を欲しがっているのかも知れません。雄大な山の緑の景色の中からメロディが流れ出てくるような歌です。

わたしより若い人へと飛んでゆけ車内をぶらぶら蚊の舞い飛べば　　鈴木裕子☆

若さに対する羨望のような思いをユーモラスに表現しているのが魅力的です。通勤、通学など張り詰めた車内の空気と、「ぶらぶら」と頼りなく飛んでいる蚊との対比が見事です。若さがまだ残っているからこそ、こういう優れた作品が作れるのでしょう。

島影に鳴く海猫の声のして地引網引く浜活気づく　　塩野　伸

遠くから聞こえる海猫の声という音から始まり、手前の地引網に視線が移っていく構成が見事です。地引網を引く人々の掛け声が聞こえてくる歌です。

何となく誰かと会話したくなり手帳開きて文したためる　　鈴木知子☆

日常のふとした心の揺らぎが優しく表現されていて、どことなく惹かれる作品です。このような微妙な心情を表現するには短歌がぴったりです。

中国の映像を見て黄砂知る自然現象凄いなこれは　　大澤幸子☆

壮大な自然現象の映像を目にしたときの素直な驚きと圧倒された気持ちが真っ直ぐに伝わってきます。結句が素直に驚きを表現しています。

十月号　作品三評

橘　美千代

図書館の学習室は人まばらゆっくり読書する夏の午後　　後藤恭介☆

夏の午後の図書館がノスタルジックな気分を刺激する歌。子供の頃、夏休みに通った木造の市立図書館。人け無く静まりかえる学習室に扇風機が回っていた。

猛暑中除草耕運トラクターエンジン音を確かめながら　　越澤太朗☆

下の句に農業を営む作者ならではの視点が表現されており心惹かれる。初句と二句目と漢字の連続のため硬い。三句目と四句目もカタカナが並ぶ。初句「猛暑の中を」とし、三句目「トラクターの」と助詞を入れてはどうであろうか。

断捨離と決めた人形わが腕に抱けば目を閉ぢ心の残る　　今野澄子

横にして抱くと目を閉じる人形。作者の娘さんがかつて遊んだものであろうか。思い入れがあって捨て難いと。愛らしく微笑ましいがどこか怖い気もする。

年輪を見れば五十年程になれる木か撫でて確かむ重く硬き木　　児珠純子

年輪にて木の樹齢が五十年程であると知った作者。米寿の隣人が教えてくれた木の名エンジュに「延寿」の字を当て嵌めて。木を撫でて、年月を刻み生きてきた木を慈しむ作者が目に浮かぶ。

足早に山頂めざす身罷りし二十七歳息子の姿よ　　河原木光子☆

亡くなられた息子さんが元気であった二十七歳の時の姿を作者は思い出す。以前、筆者は五月号作品三評で、幼い息子さんを亡くされたと書いたが、息子さんが亡くなられたのは二年前とのこと。作者にとってまだ過去ではなかったのだ。事情を知り、五月号の歌と共に味わうと、作者の思いが一層胸に迫ってくる。

島影に鳴く海猫の声のして地引網引く浜活気づく　　塩野　伸

海猫が鳴くとは明け方の海辺であろうか。集まって来た人々が地引網を引き活気づく浜。塩の香が漂って来るようだ。

ねぶたの夜に煩ひ多き跳人ゐて跳べば跳ぶほど闇に沈みぬ　　同

写実に徹した前の歌とうって変わり主観が前面に出た歌。写実派には受け入れられないかも知れないがこういう歌もありかと筆者は思う。以下は筆者の想像である。この歌は若い頃の作者自身のことではないか。かつてねぶた祭りに跳人として参加していた。感受性鋭く自意識の高い若者ゆえに苦悩も多かった。祭りに盛り上がり活気づく周囲が明るければ明るい程、自身の暗さがいっそう際立つ。

猛暑日初日の犠牲者はメダカたち湯となる水に命絶えたり　　髙橋睦夫☆

夏の暑さが年々増すばかりで、今年は四十度以上の酷暑日が追加された。三十五度以上が猛暑日。その過酷さの犠牲となったのがメダカたち。自然界の異変に目を向けた作者の視点が素晴らしい。

「部屋干し」の予報続きて増えてゆく洗濯物にため息をつく　　和田妙子

東京の連続雨の日が過去最長を記録したとか。各地でも。下の句に実感が溢れ作者のため息が聞こえて来るような。

作品三

音の追憶

新　井　光　雄☆　東京

「クロイツェル・ソナタ」を聴く朝さて今日は何を為すべし八十路すぎれば
ベートーベン近づき難く「第九」を初めて聴いたは小五の時か
何故だろう最近よく聴くベートーベン「運命」だけで今年三回
ボンにあるベートーベンの生家には二度訪れた出張ついで
ベートーベンその曲よりも音楽室あの肖像画忘れられない
「第九」の「歓喜の歌」を聴く時は何故なのだろう居ずまい正す
ベートーベン聴くたび何故か肩がこる口直しにとモーツアルトも
年末によく聴いてきた「第九」も八十路を過ぎて卒業とする

後　藤　恭　介☆　茨城

早朝に二人で作業する高枝切り短時間でも汗と疲れと
ベランダの赤とピンクのゼラニウム次々咲いて元気をくれる
役員で妻も頑張る夏まつり盆踊りにも参加するかな
この秋の料理の会のバス旅行は醤油とビールの工場見学
工場は自動生産に進化して映像で見る缶ビールの生産
地球儀を回して国を確認すネパールの土石流災害に

真夜中に震度五弱の地震あり本の崩れ程度で一安心す

越　澤　太　朗☆　茨城

オクラの花盛りを過ぎてとんがり帽の実は青々と夕餉の膳に
紫蘇の実を指でしごいて収穫す大株はポリバケツに溢れんばかり
秋蒔きのほうれん草は縦列に十割発芽すメーカーの種
長雨の後の畑のサツマイモ葉はまだ青く試し掘り遅らす
長雨をものともせずに蕎麦の花に晴れ間に群がる虫ら頼もし
トラクターの農閑期前の一仕事エンジン撫でてケア忘れず
楽しみは晩秋収穫の新蕎麦の色と香りとみんなの笑顔

長　澤　千恵子　山形

秋霖に稲の刈入れ遅れたり米価下がりて心の沈む
珍しく米の消費の多くなり保有米無し新米待たる
この年の敬老会は紅白の萩咲く店で一堂に会す
伊香保では三六五段の石段登る足取りゆるく楽しみながら
この年の同級会は穴原にてなつかしき顔に会ひて燥ぎぬ
久久の晴天の中ドライブす風きらきらと爽やかな蔵王

松　田　忠　一☆　山形

中秋の月を透かして流れゆくちぎれた雲の行方何処へ
星空に願いをこめて呼びかけて安らぐ想い無窮へひびく

刈り取られゆく散居村それぞれの織りなす景色黄八丈に似て
久方に直江石堤たずねゆき想いを馳せる時の移りに
西吾妻スカイバレーの白布峠越えて眼下の裏磐梯へ
晴れわたる濃い藍色の山影に寒露夕暮れ里の灯ともる
黄昏の何故か懐かし田舎径秋の風立ちコスモス揺れる
源流の谷の瀬音が胸に沁むもみじの葉陰に姿見せずに

長谷川　剛　山形

久しぶりに施設に姉を見舞ひたり笑顔絶えねど会話続かず
散歩道の藪より洩るる虫の声耳近づけて秋を聞きをり
秋彼岸に喧騒離れて手を合はす父の墓石に水をそそぎて
八年の風雪に耐へしトタン屋根に雨の合間にペンキ塗りたり
いちはやく熟れた葡萄を持ち来たる義弟ありがたし汗流しゐる
朝霧の刈田に鷺の落穂食む初秋の風景絵画のごとし
朝霧の晴れ上がりたる昼近くひかり秋づく白き湖
「おめでたう」となかなか言へぬもどかしさ今日七十八歳妻の誕生日

今　野　澄　子　山形

写メ届くストレス発散になるらしき娘の料理は郷土の芋煮
秋彼岸伯父の五十回忌済みてのち一役終へたと夫の一言
仏前に仄かに香るパイナップル彼岸の人を偲びつつ食む

ハグをしてわれに言葉を遺したる検査入院の友帰りこぬ
祭り日の神燈明るく賑はへり空き家の多くなりたる村に
金木犀花付きよしと待ち居しが長雨続き香り消えゆく

倍賞千恵子コンサート　河原木　光　子☆　広島

ピアノ弾くご主人と登場千恵子さん東京オペラシティコンサートホール
歌声の子音の発音明瞭にのびやかな声ホールに響く
曲の間の小六さんのトークに和みゆき休憩なしにコンサート続く
白黒の衣装にて歌う千恵子さん時おり椅子に腰掛け歌う
語るように「しあわせについて」アンコールのその歌詞胸にしみいでてくる
千恵子さんの十四曲を聞き終えてあと二十年がんばっていけそう
のぞみにて窓側席に座れども行きも帰りも富士山見えず

児　珠　純　子　山形

若き日にセールスマンが家に来てミシン勧めき多機能付きの
十万を月賦払ひで購ひし電動ミシンは十二キロあり
洋裁の教室に通ひ流行のシャネルスーツを縫ひし日のあり
直線縫ひ・裁ち目かがりで息子らの図書バッグとリュック作りき
鈴の緒と地蔵様の前掛けを最後に縫ひてミシン手放す
モノクロの写真の中の叔父叔母は学生服着てわれは乳飲み児
一年ぶり会ふ子は髪を染めてをり生え際白くなりたるを見る

和田妙子　山形

常ならば速達にする郵便を重さだけ問ひて心配される
星見れば苦手な理科も楽しいと父と見上げし星座なつかし
一本の栗の木に生る実の多さ拾ひつつ思ふ切れば楽かと
「敬老のお祝ひです」と紅白の大福われに届き驚く

鈴木裕子☆　千葉

鼻腔(はな)拡げ帰路の夜道で香りかぐ木犀の花夕飯のカレー
もふもふの芝犬勇気を出して聞く名は源さんとこれぞぴったり
寒いねと言ったその日に汗をかく今年の季節に振り回された
市内の清掃イベント翌朝には駅前に散らかるチューハイの缶

倉田ひろみ☆　広島

午前中シニアが集うスイミング話題は孫や体調のこと
ポスターの「挑戦」の文字に背を押され初心者水泳レッスンを受く
高一の水泳補習の夏以来泳げないまま半世紀過ぐ
ばた足や腕の動きの説明は脳に伝わり手足に届かず
息継ぎはうまくできないばた足は力が入って腰から沈む
水底の碁石拾いから始めたと八十歳の人に励まされおり
「ある日ふと楽に泳げるようになる」本当なのか「ある日」は来るか

鈴木知子☆　埼玉

朝六時いきなり響く蝉の声ミーンミンミンと憚りもせず
野葡萄に近づき来たるスズメバチをガサッとカマキリ瞬時に襲う
忘れてた南部鉄器の風鈴を九月の窓に急いで吊るす
風鈴は九月の風に不似合いで一日吊るして早々仕舞う
気が付けばいつもの所に芽を出して曼珠沙華は時期を忘れず
キズありと表示の松茸人気あり悩みいる間にたちまち失せる
大相撲テレビの前に陣取りて力士に合わせ体が動く

髙橋睦夫☆　茨城

安価なる中国産の波に耐え蘇りたる今治タオル
タオル片五秒で沈む吸水の革命成せる今治の職人
吉野川観光船で川下り太古の巨岩と緑濃き流れと
秋雨の合間に青空広がりて妻と出かける「醗酵の里」へ
光圀公手植えの槙の太き幹くねりて今は神気漂う
国産の鰻の蒲焼き一尾買い妻と味わう小さな幸せ
十三年十九万キロを共にした愛車との別れ写真に収む
沈下橋欄干無き橋楽々と軽トラ走らす地元のおばさん
二十七年前息子に持たせし扇風機猛暑の夏に引退したり

塩野伸　山形

シベリアの凍る抑留耐へ忍び祖国の地べた踏みし喜び

南方の玉砕島を生き延びてゲゲゲ妖怪巷跋扈す
月影に塵を置き去る駐車場誰も知らねど月は見てゐる
四五人で集ひし酒の最後には俺が俺がの大合唱に
満月に団子と芒供へれば先日逝きし友の顔写る
十六夜に告知憚る末期癌覚悟を決めて妻と対峙す
紅葉の庭園の鯉に餌やれば甘えるやうに指に吸ひ寄る

大　澤　幸　子☆　東京

ヒソヒソとゴルフ中継リポートするゴルフ好きかなあの長嶋氏
熊がでる山降りてくるエサがなく民家の近く畑あらして
訃報聞く昭和時代の著名人また続いてる「お悔やみの心」
スマホゲーム塗り絵にはまりさまざまな色塗り込みて穏やかになる
遊園地ミラーでできている迷路には四方が光るわが出口どこ

石　戸　俊　和☆　千葉

午年の来るごとこころ変われども五たび迎えて地を巡りたし
青蛙に通電せしのち放擲す無垢の怖さよ幼年期とは
馬手に杖弓手動かぬ私にもバイトはティッシュを差し出してくる
手摺りなく段差ばかりのモダン宿料理は良いがもう泊まれない
今日の宿仲居の辞儀に弾めども延びたる語尾に心萎めり

（☆印は新仮名遣い希望者です）

作品一　石渡　静夫

夕暮れの光の中に精悍な清盛像立つ海を背にして　桜井美保子
近ごろは知らぬ方から労りの声かけられて我は複雑　倉浪　ゆみ
八十年過ぎ行く時間を意識せず流れ戻らぬものとは思わず　林　美智子☆
人や物分解したりて組み立てるピカソの絵に親しみを持つ　伊澤　直子☆
けふは今日あしたは明日といふやうに木槿は開き夕に散り落つ　中島千加子
梅雨明けて四、五匹の蜻蛉が輪を描き幾度もよぎる四階の窓　三好　規子
新しき糠床に漬けた野菜達上手く漬かれと吾は蓋を閉める　永野　雅子☆
君子蘭雪に折れたる葉を伐れど大輪の花咲かせる力　大野　茜
あちこちと傷み増え来る古家とわが身を手当てしつつ生きなむ　梶尾　栄子
もぎ取りてカリカリ音たて齧りたる福島恋しい桃が届いて　高橋　燿子☆

作品二　大塚　亮子

短夜の台風の雨に打たれ居て夜明けを待ちて開くアサガオ　藤田　英輔☆
その昔わが一番の楽しみは自転車で来るアイスキャンディ売りの声　安川　敏子☆
親戚を転々としたる食糧難小学二年で転校七回　立石　節子☆
酷暑日の連続三日続きゐてわが町「桑名」有名となる　松居　光子
年毎に父に似てくる弟が訪ねて来たり真夏の午後に　小嶋　知葉☆
夫と吾とふらり寄りたるラーメン屋どんぶり一杯完食出来ず　津田美知子
夫逝きて月命日の十回目朝の墓前に初の蝉聞く　奥山　清子
雨の畑に泥跳ねのつくナス拭ひ手渡す夫の気持受けとる　井上　鈴子
検診の終わった後はスッキリと喉元過ぎるビールの旨さ　首藤　文江☆
忘るること多くなりたる花の名を荷札に書きて枝に留め置く　井出　裕子

作品三　天野　克彦

朝日あび洞爺湖輝く窓の外新緑の丘を二人で歩く　後藤　恭介☆
幾年ぶり庭の棗は実を結び良きことあるかと秘かに思う　越澤　太朗☆
雨上がり羽化した蝉はじつとして柔らかさうな翅透き通る　今野　澄子
戸を繰れば網戸に蝉の止まりゐて今日は広島原爆の日なり　長谷川　剛
植木さんの直売所にて売られゐる玉蜀黍は今年も旨し　長澤千恵子
子の呉れたる金魚絵柄の一筆箋はがきに貼りて暑中見舞ひに　児珠　澄子
下り来る青年四人とすれ違い柔軟剤の清き香のこる　河原木光子☆
線状降水帯なんてニュースの中だけと思っていたがやまぬ雨音　鈴木　裕子☆
ねぶたの夜に煩ひ多き跳人ゐて跳べば跳ぶほど闇に沈みぬ　塩野　伸
尊敬と感謝の心を共にして仕上げの路を妻と一緒に　髙橋　睦夫☆

歌集／歌書御礼

編集室・佐藤靖子

■秋葉静枝歌集
『夜の森の風』

令和八年七月二十五日発行の第五歌集で。平成二十一年から四二五首を収めている。大方曇りの空から時折り注ぐ光、何か心に懸かる憂いを乗り越える力強さで老いを生きる、そういう感じを一冊から受けた。

二代前に、何かしらの家の没落ということがあったのだろうか。

劫を経て深みある人間の味ならん祖父が身代潰しし酒は

没落の家系に懲りて老い積むも飲まざりし父の悲しみを思う

俥にて大子より水戸へ通学せし義母の気概を継ぐものは誰

支えあいながら。

八十過ぎて辞職の夫の花束は金輪際の華やぎに咲く

老い夫に「ステージ・4」と告知され視野が一気に黄昏れて来ぬ

起伏に富む一生なりしと思うべきや手術を十度身に負わせ来て

励ましの手紙毎日届け来し夫に生かされ退院せしよ

物思いは対象に託して。

容赦なく窓を打つ風いつの日か友となるべく眼を閉じて聴く

ふるふると煮られているも絹豆腐何れも芯は崩すことなし

地震の時、その後。

避難所に居場所など無く戻り来ぬボトル半分の水を貰いて

原発の稼働の話に落ち着けぬこの後如何程の命というも

（星雲叢書第八四篇　ながらみ書房刊）

■石原昭彦歌集
『松風のさやぎ』四国遍路の歌

令和八年七月三十一日発行の第一歌集三九六首を収めている。一章が始まる前の扉には―弘法大師空海を尊崇した祖母イソノの御霊に捧ぐ―とある。巡礼の歌の中に、それと繋がると思われるところがあり、心は筆者と共に巡り歩いた。「新アララギ」「林泉」「宮崎アララギ」。短歌現代歌人賞受賞他。

境遇が一茶に似て。

二枚目にて艶聞多き父なりきつひに二十三歳の継母を連れ来ぬ

中学の吾より八歳上なりき継母きて生家去りし日思ふ

うどんの国で。

ロートル医われは初めて体験す電子カルテとコロナの検査

医療秘書はわが子より若し教はりてたどたど操作す電子カルテを

同僚の行方を探す一連に感ずる著者の誠意。

わが友が辞職強いられ移り来し郷里の病院やうやく突き止む

受付は個人情報盾にして電話を教へず元同僚の

巡礼では生家のある徳島も訪う。藤井寺では昔の同級生が居た。生家は飯尾。

この寺の遍路宿の子恵美子さん六十年前同級なりき

生家の飯尾について。

始皇帝の末裔といふ長曽我部にわが祖飯尾常重敗れき

百済王後裔飯尾氏わが祖ゆる渡来系行基

空海親し

湧き水に肺病治しし空海か今も溢るる肺大師堂に

祖母亡妻恩ある人々そして山頭火を道づれに空海の足跡をたどって心洗われたことを実感し、次のように至る。

残る世を感謝と使命に生きよとの声の聞こえて診療つづく

（現代短歌社刊）

■小笠原小夜子歌集
『まほろばはこゑ』

令和八年九月七日発行、三二九首を収めている。久遠の過去と未来へのベルトに乗って何事もゆったりと消化あるいは昇華されていくような感じを受けた一冊。『まほろばはこゑ』の声とは、風の音、虫の声、光の様子、土の息等であろうか。鈴木英子氏の寄稿文に―「山藤ね」「いや、桐だらう」山深くうすむらさきは遥かなひかり―に対して、これだけでこころが充足するような…中略…「これだけ」の豊かさに気づかされる。という文にも感じ入った。

ここでは自然そのものを詠んだものと、自身の生活に関わる歌を挙げる。著者は「天象」に三十余年属していた。また第50回静岡県芸術祭賞を受賞している。

日の射せば忘れたるもの跋扈して障子たちまち影絵を作る

こゑもなく生まれこゑなく朽ちてゆく見知らぬキノコの一生雨降る

草奔に風ほそほそし抜け殻のあをだいしやうはいちまいの無垢

果てのなき海岸線をけぶらせて梅雨の日本は海に溶けゆく

梵鐘に触れきたる風まつすぐに軒先ふかく風鈴鳴らす

せいせいと砥石にあてるうすき刃の傷の研がれて春の足音

大き橋につづき小さき木橋越ゆまほろばへゆく吾の入口

テラスには嵐の余波のふとき雨思ひつきりつて心地良いなあ

父、母死して。

ひしと抱くひたすらいだくつめたさをつらぬきてゐる父の真実

回游の魚の泪にふるるごと母亡き朝の細道くだる

（いりの舎刊）

うた新聞

短歌総合紙・月刊　年間定期購読6000円（税・送料込）

うた新聞　おかげさまで創刊14周年！

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集、全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの舎まで

〒一五五―〇〇三二　東京都世田谷区代沢五―三二―五　シェルボ下北沢四〇三
電話　〇三―六四一三―八四二六　ファックス　〇三―六四一三―八五二六
メール　chumon@irinosha.com

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞　補記⑨

大山敏夫

大友柳太郎のエッセイ「僕の豆自序傳」というものを読んだ。雑誌『大映映画』一九四八年十一月号に掲載されたもので、その奇数頁の約三分の二ほどのスペースに、本文19字×27行4段組みになっている。この割付だと、かなり大型サイズの雑誌だと分かるし、小誌のA5サイズにすれば、ほぼ一頁半の文章となろう。「大映中部支社宣伝課編」だという。

戦後大映は永田雅一社長時代になって体質の変換が行われ、『大映ファン』という雑誌と共に一九四七年に生まれた。

大友柳太郎も昭和十七年に日活、新興、大都映画が合併し生まれた「大映」に所属していた。そういう中で、戦況厳しさを加える昭和十八年、召集令状が舞い込み、結婚をして、戦地へ。

戦地より帰還後にも籍を大映に置いて数多くの映画に出演していたものの、希望するような重い仕事が舞い込まずいろいろ悩んでいた頃か。

初志貫徹。一度自分の歩んで来た足跡を振り返り、心新たに再スタートの機会にしようという覚悟も見え隠れする。タイトルの「自序」だと書物等の自身の前書きの意味になるので、自伝のことなら普通は「自叙伝」の方がふさわしい。

この文の特徴は、要所要所に自作の短歌を据えて、変化をつけている所かと思う。大友が自分の短歌をあげて語るものは他にないので興味深い。そのスキャンした上二段までの前半部分画像を次頁にあげるので、ご覧頂きたい。

この文は旧仮名遣いで書かれ、また歌集の掲載表記と違う箇所もあり、また、歌集に載っていない作品もあるので、その都度一応指摘して行きたい。入れられたイラストの顔はどこか似ていない。

初めにあげられた一首は、歌集だと漢字の「潮」になっている。仮に仮名に直すにしても旧仮名遣いなら「うしほ」となろう。簡潔な生い立ち記はさすがに文章に手慣れている。

経済的には苦しかったが仲屋中冨家の再興という期待を背負い、松山中学へ進学した。そして昭和四年の時に「忘れ得ぬ初戀の甘く美しい思ひ出」に遇う。その人は一つ上の「えび茶の袴の女学生で背のスラリと高く…全校の憧れの的」となっていた。この制服は市内の済美高女のものかと思う。彼女が短歌を作っていることを知った中冨正三は、無断でその作品を自分たちの雑誌に転載し親しくなろうとしたが、妄想した展開に程遠く、理路整然たる抗議文を貰い失恋する。彼女は謡曲の師範の家の娘で、その垣根には折しも白い夕顔の花が咲いていた。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花　　紫式部

紫式部の『源氏物語』には「夕顔の巻」もあり、歌もある。正三もおそらく式部の一首は知っていたのであろう。本人の思い入れは十分理解しても、歌集『渚』の夕顔の歌については平凡だと思う。



僕の豆自序傳

大友柳太郎

御他聞にもれず諸所流浪の末、親子三人辿り着いたのが愛媛縣松山市。僕が小學校の五年生だつた。

夕顔のほのかに白き夕ぐれの
そのひとゝきを今も忘れず

南國の温泉の街に七年間――夢多い青少年時代を送つたのだが、今もなお忘れ得ぬ初戀の甘く美しい思ひ出などもあつて、昭和五年三月松山中學校を卒業、在學中同好の學友達と俳句の研究に沒頭――これはおそらく同校卒業の俳人、正岡子規、高濱虚子、河東碧梧桐氏等諸先輩の影響からだつたのだらう。（當時の俳友の一人で、現在この道で一家をなしてゐる者に、「馬酔木」の石田波郷君がゐる。）かにかくに第二の故郷とも云へる松山であつてみれば、今もつて折節夢に見るのは懐しいその折のあけくれのこと！

すべあらばも一度撫でむ故里の
彼の城跡の青銅の馬

胸一杯にたぎりたつ青雲の志を抱いて獨り大阪の義兄姉をたよつて松山を後に――

中学では「俳句の研究に没頭」したとある。子規、虚子、碧悟桐ら学校の先輩の名を挙げている。そして親友の波郷の名も忘れない。俳句の盛んな土地であり学校であった。当時正三が作った句が、

≪捨て犬のあとついて来しとしの暮≫

だという。句を見る限り俳句には向いていないことが何となく解る。だがこの時点では後に短歌に向かうことになるなど少しも匂わせていない。

父より学費が続かないと告げられるという家庭の事情で進学を断念し、卒業後に大阪に出て歯ブラシの行商を始める。

「胸一杯にたぎりたつ青雲の志を抱いて」と言うが、現実は厳しいものがあったかと思う。「第二の故郷とも云へる」と添えるのは次の一首へのアリバイ作りか。

すべあらばも一度撫でむ故里の
彼の城跡の青銅の馬

歌集には≪春の雨に故里のお寺の青銅の馬の肌へをふとも想へり≫となっているので、少し違う。改作か別の一首かとなるのだが、これが第二の故里に繋がる。

歌集『渚』でいう故郷は山口県の離島「柱島」をさすが、この歌でイメージするのは「松山」なのだ。「寺」から「城跡」に改作したのは「柱島」をイメージされたくないという心理が見える。

エッセイ「僕の豆自序傳」の後半部分画像を下に載せる。

昭和五年の十月だとあるから大阪に来て程なくだろう。父親と相談して辰巳柳太郎に弟子入りし、新国劇に入る。

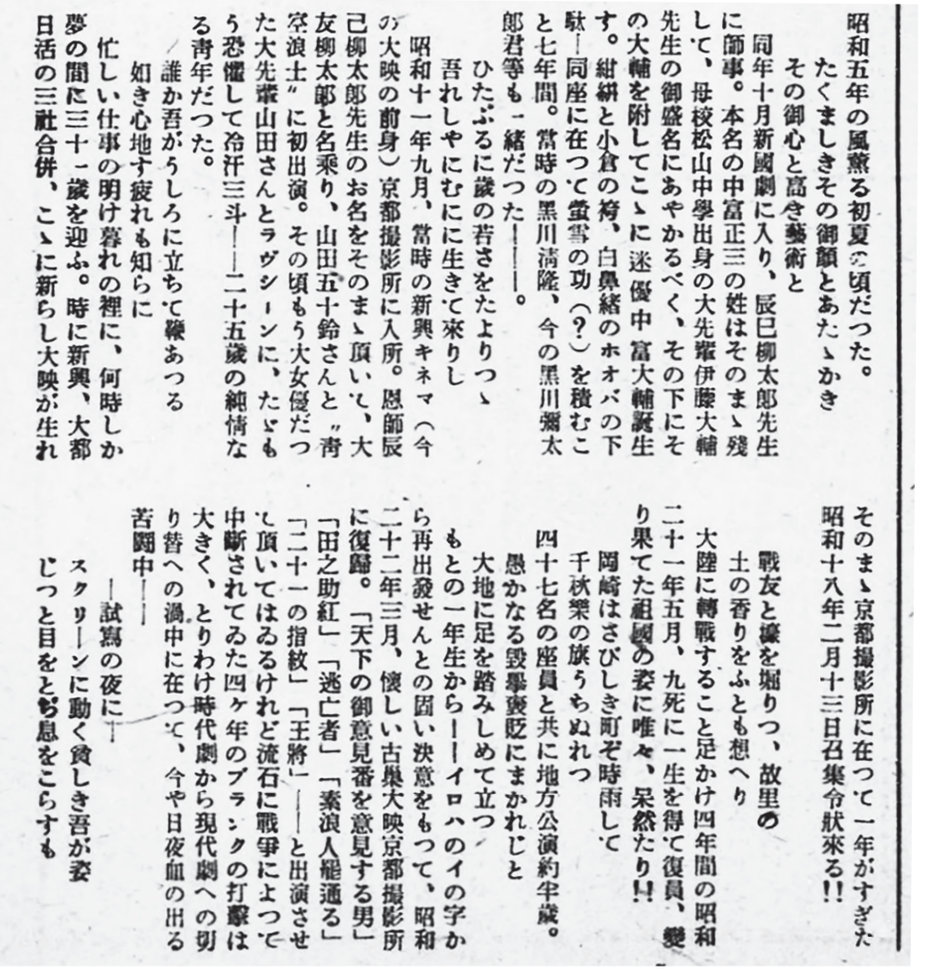
…迷優中富大輔誕生す。紺絣と小倉の袴、白鼻緒のホオバの下駄…

なる格好は書生・苦学生スタイルか。この時代、新しい演劇を目指すのは新国劇ばかりではなかった。しかし、多額ではないものの劇団員すべてに手当てを与えていたのは新国劇だけであったという。

「蛍雪の功？　を積むこと七年間。」と述べ、黒川弥太郎の名をあげるのは意識するライバルへのリスペクトだろう。

ひたぶるに歳の若さをたよりつつ
吾れしやにむにに生きて來りし

そして映画界への転身。初主演の映画



昭和五年の風薫る初夏の頃だつた。
たくましきその御顔とあたゝかき
その御心と高き藝術と
同年十月新國劇に入り、辰巳柳太郎先生に師事。本名の中富正三の姓はそのまゝ残して、母校松山中學出身の大先輩伊藤大輔先生の御盛名にあやかるべく、その下にその大輔を附してこゝに迷優中富大輔誕生す。紺絣と小倉の袴、白鼻緒のホオバの下駄―同座に在つて蛍雪の功(?)を積むこと七年間。當時の黒川清隆、今の黒川弥太郎君等も一緒だつた――。
ひたぶるに歳の若さをたよりつゝ
吾れしやにむにに生きて來りし
昭和十一年九月、當時の新興キネマ（今の大映の前身）京都撮影所に入所。恩師辰己柳太郎先生のお名をそのまゝ頂いて、大友柳太郎と名乗り、山田五十鈴さんと〝青空浪士〟に初出演。その頃もう大女優だつた大先輩山田さんとラヴシーンに、たゞもう恐懼して冷汗三斗――二十五歳の純情なる青年だつた。
誰か吾がうしろに立ちて襷あつる
如き心地す疲れも知らに
忙しい仕事の明け暮れの裡に、何時しか夢の間に三十一歳を迎ふ。時に新興、大都日活の三社合併、こゝに新らし大映が生れそのまゝ京都撮影所に在つて一年がすぎた昭和十八年二月十三日召集令狀來る!!
戰友と壕を堀りつゝ、故里の
土の香りをふとも想へり
大陸に轉戰すること足かけ四年間の昭和二十一年五月、九死に一生を得て復員、變り果てた祖國の姿に唯々、呆然たり!!
岡崎はさびしき町ぞ時雨して
千秋樂の旗うちぬれつ
四十七名の座員と共に地方公演約半歳。愚かなる毀譽褒貶にまかれじと
大地に足を踏みしめて立つ
もとの一年生からーイロハのイの字から再出發せんとの固い決意をもつて、昭和二十二年三月、懐しい古巣大映京都撮影所に復歸。「天下の御意見番を意見する男」「田之助紅」「逃亡者」「素浪人組通る」「二十一の指紋」「王將」――と出演させて頂いてはゐるけれど流石に戰爭によつて中斷されてゐた四ヶ年のブランクの打撃は大きく、とりわけ時代劇から現代劇への切り替への渦中に在つて、今や日夜血の出る苦闘中――
―試寫の夜に―
スクリーンに動く貧しき吾が姿
じつと目をとぢ息をころすも

『青空浪士』での大女優山田五十鈴とのラブシーンも回想する。

誰か吾がうしろに立ちて鞭あつる
如き心地す疲れも知らに

戦時下の厳しい社会の中で、映画界の再編が行なわれ、自身も三十一歳となり召集令状を受ける。

以後は戦中戦後の話となる。挙げられた戦地で塹壕を掘る歌は、当然歌集『渚』には入っていないが、後にリメイクされたという歌集『柳』には収録された模様。足掛け四年の軍隊時代。運よく生き残り復員。「変り果てた祖国の姿に唯々、呆然たり!!」は痛々しい。

父が浪曲師、十四歳までに十三回親が変わったという波瀾万丈の芸人玉川スミが、漫才で「桂小豆」を名乗る頃、慰問団の一人として戦地の大友柳太郎に逢ったという。著書『ちょっと泣かせてください』（一九八三年刊）の中で細やかに、

…大友さんは星一つで馬の世話をしていました。私たちは部隊長にお願いして、大友さんに「国定忠治」をやらせたいとお願いしました。すると、部隊長の許可がおりて、楽屋に現われた大友さんは、ユカタを借りて、部隊長の日本刀を下げ「万年溜」の場面を演じ兵隊を喜ばせました。私たちは、部隊長に「映画で有名な大友柳太朗（ママ）さんがこの隊にいるけど、あの人だけは無事に日本へ帰してあげたい。芸界では貴重な人です」と、お願いしたのです。つぎの慰問先に移動したとき、その隊長さんから電話が入り

「小豆さん、大友さんのことは、北京の本部付きにしたよ。それなら日本に早く帰れるからね」

と連絡を受けたと書いている。「九死に一生」の背景には、こんな話も隠れていた。大友にとって玉川はまさに女神であった。後年この二人はテレビの「桃太郎侍」で一度だけ共演している。

当時の「星一つ」（二等兵）、若々しい軍服姿の写真も



遺されている（左上画像）。

その後「四十七名の座員と共に地方公演約半歳」とあるのが、四国など巡業に出た頃の話。年譜によると、昭和二十二年「劇団新星座を主宰して地方巡業を続ける」とある。

文では『渚』の巻頭の一首である《岡崎はさびしき町ぞ時雨して千秋楽の旗うちぬれつ》をあげて地方巡業のイメージをダブらせている。また、《愚かなる毀誉褒貶にまかれじと大地に足を踏みしめて立つ》をあげて、「イロハのイの字から再出発せんとの固い決意をもつて…古巣大映京都撮影所に復帰」と述べる。

「戦争によつて中断されてゐた四ヶ年のブランクの打撃は大きく、とりわけ時代劇から現代劇への切り替への渦中に在つて、今は日夜血の出る苦闘中」と胸の内も吐露する。

最後に挙げた一首は、『渚』では映画界にデビューして、初体験の興奮を歌った印象的なものである。息遣いまで聞こえそうだ。

「うた新聞」9月号
ご掲載御礼
（筆者　鮫島氏にお礼申します。　冬雷編集室）

●うた新聞（二〇二六年九月号）より転載

名優若き日の歌集

大山敏夫著『大友柳太郎歌集『渚』鑑賞』

鮫島　満



時代劇映画が娯楽の主たるものであった頃の人にとっての「怪傑黒頭巾」「丹下左膳」等のヒーロー役大友柳太郎が歌人であったことと、その作品の一部を紹介する本が出版された。著者は「この稀少なる歌集は、古書研究家として知られるジャーナリストの高橋輝次氏より、縁あって譲り受けたもの」という。そして中学卒業後の貧しい生活、新国劇に入って以後の映画俳優として独り立ちする二十八歳までの苦しい生活、新国劇主宰の辰巳柳太郎への感謝が詠まれているという。

明治四十三年生まれの作者は松山中学時代に、後に俳号石田波郷を名乗る同級生に呼びかけて文芸雑誌を創刊したという。波郷は後に俳句は柳太郎に教わったと回想している。その柳太郎は自らの生活を俳句ではなく短歌に詠み始めているのである。

・たまさかに小銭をもらひ居酒屋に浸りてふとも故里思ふ

を挙げ、中学を出て二年目、大部屋時代の歌だという。

・うちつづく徹夜のセット出で来れば目に沁み渡る五月晴れかな

昭和五十八年配本の『昭和万葉集』（講談社）に他の三首とともに収録された歌である。大山氏は柳太郎が歌人として認められていたらしいことを喜んでいる。

著者は作品を概ね温かく読みながらも拙さについては結社主宰者の習慣からか、助詞や副詞、感情語などの使い方の欠点を指摘せずにいられないようである。これは歌誌の会員への指導でもあるのだろう。それでも「冬雷」の通信には「独学我流の環境にあって立派な作品を残された」と讃えていることを加えておく。

（冬雷短歌会・一〇〇〇円）

冬雷短歌会文庫新刊！

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞　大山敏夫著

昭和十四年、後援会から刊行された歌集を忠実に再現して、その全作品を鑑賞した書き下ろし。収録作品128首。自序、跋文付き。他に〈「渚」とは〉、〈大友柳太郎の背負ったもの〉の論考二つ収録。本文140頁。

＊これは小誌別冊付録ですが、希望のあれば頒価千円（送料共）にて配本致します。

350-1142 川越市藤間540の2の207　大山方　冬雷短歌会



映画では豪放磊落!!
短歌では繊細多感!!

●うた新聞（二〇二六年九月号）より転載

景気良き頃

中村　哲也

社員らにゴールドバーを配りしは昭和の終はり我が入社前

交代で会社費用にグアム旅当時を知りたる社員も少なき

恒例の社員旅行が途絶えしはリーマンショックの直後と覚ゆ

メーカーの粋な計らいか販売報奨金の一部をゴールドバーで代理店に付与。それを全社員に数グラムずつ均等に分けたとは、私の入社数年前の事。個人的にはバブル絶頂を過ぎた後の入社ではあるが、それでも福利厚生の一環でグアム旅行に行かせて頂いた。当時の会社は、まだまだ手計算も多い時代で、終電を逃してタクシーで帰宅した事も幾度か。またその後の社内業務のPC化への適応も悪戦苦闘であった。されどそれらの苦労が、今を生き抜く力になっているように感じている。

編集後記



▽冬雷ホームページでは毎月最新号を掲載更新している。印刷所から雑誌が出来上がってくる日よりも大抵一週間くらいは早いので、いち早く内容を知りたい時に便利である。そのPDF版の最新号は会員のみならず、広く一般の方々にも自由にご覧いただける電子書籍である。また「入会案内」には見本誌、入会への問い合わせなども出来る窓口も設置されている。

▽大山敏夫氏の『大友柳太郎歌集「渚」鑑賞』補記は戦後の映画雑誌に掲載された大友のエッセイ（短歌と文章）を取り上げている。さらに戦中、慰問団として戦地に赴き、そこで大友に出会ったという芸人玉川スミの書いた資料も添えられ、俳優大友の人間像と短歌に迫る充実した論考で面白く読ませて頂いた。

（桜井美保子）

▽「応接室」に「白珠」の安田純生主宰をお迎えできて喜んでいる。地元の自治会の仕事を引受けて、人柄を思わせる悠々たる日常がうたわれ、面白い。勉強させて頂いた。

▽本年最後の割付を終えて、作品の届かなかった姉川様、この数ヶ月休詠状態の稲田様などが案ぜられる。そういう中で、冬雷カウンターの数字は一〇九を記し、ついに本年1月号の一〇七を二名上回った。これは率直に申して嬉しい誤算である。来年は冬雷改革計画の二年目。これを弾みとして力強く進みたい。

▽このところ歌壇の先輩、友人の逝去の報が続いている。「花實」の利根川発氏、そしてこの九月には「短歌21世紀」代表の大河原惇行氏が他界された。氏とは十代からの知友で当時わたしが呼びかけて作った超結社勉強会「日本青年」にて出会い、アララギ若手勉強誌「ポポー」創刊へと同行した。ご冥福を祈りたい。

▽一年間のご助力、ご協力に、心より御礼申し上げる。

（大山敏夫）

▽今月の応接室にお出で下さったのは安田純生様。総合誌等でお名前は存じて上げていたのだが、町内を散策する様子をゆったりと詠まれた作品と穏やかな笑顔の御写真を拝見出来て嬉しかった。

▽編集長の連載は毎回新しい情報が書かれていて楽しみに読ませて頂いている。今回は大友柳太朗の書いた『僕の自序傳』が紹介されている。幼い頃からの自分について書いたもので苦労の多い中でも青春の頃の思い出には素晴しい友人と出会い、俳句の研究に没頭した日々があり初恋などもありほっとする。

▽例年であれば大会が終ってほっとしている時期であるが、今年は誌上大会なので頂いた詠草を数日前に発送した。期待していた全員参加とはならなかったが活発な作品評を待っている所である。年に一度の大切な冬雷のイベントの結果が楽しみである。

（小林芳枝）

▽新入会

石戸俊和（ホームページより）

今月の冬雷（冬雷カウンター）　出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
31	32	29	17	109
（－1）	（0）	（+1）	（+1）	（+1）

＊上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。

《冬雷規定・掲載用》

一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）

一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九　小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）

一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。

一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。

一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。

一、月刊誌「冬雷」を発行し、会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七大山方」とする。

一、編集委員若干名を選出し、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。

一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納のこと。ただし、会員本人の事情による途中退会の場合の会費は返金しない。

＊会費は原則として振替にて納入する事。

A　作品三欄は年額　一七〇〇〇円
B　作品二欄は年額　一二〇〇〇〇円
C　作品一（冬雷集を含む）は年額　二四〇〇〇円
D　維持会員（会員の申出により定める）年額　三〇〇〇〇円
E　購読会員は　九〇〇〇円

＊以上、二〇二七年一月一日より執行する。

《投稿規定》

一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。

冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
・担当　大山　敏夫
作品一欄　・担当　桜井美保子
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分）
・担当　小林　芳枝

一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。

一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。添削は入会後五年程度を目処とする。

《Eメールでの投稿案内》

白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたり、色を付けたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。

一、Eメールによる投稿は左記で対応する。

大山敏夫　tourai-ooyama@nifty.com
小林芳枝　k.yosie@nifty.com
桜井美保子　mihoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》大山　敏夫　350-1142 川越市藤間 540-2-207　☎ 090-2565-2263
小林　芳枝　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409　☎ 03-3604-3655
桜井美保子　235-0022 横浜市磯子区汐見台 2-2-2-608　☎ 090-6029-0590

2026年12月1日発行

編集発行人　大山　敏夫
データ制作　冬雷編集室
印刷・製本　㈱ ローヤル企画
発行所　冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話　090-2565-2263
事務局　125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替　00140-8-92027
ホームページ　http://www.tourai.jp

小誌 QR コードです。
ここから入れます。

頒価　700円